寝る雄は今日もいく

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寝る雄は今日もいく

【Ｎコード】

Ｎ６４９６Ｅ

【作者名】

ｉｍａｉｗａ

【あらすじ】

物凄い眠気に毎日襲われ、全く気力のない寝る雄君。そうなったのは、ある日の出来事がきっかけだった。悟りを開いたような冷めた謎の女、千鶴。そしてクラスメートが恐れる寝る雄の謎とは・・？

しるか！

俺の名前は寝る雄、公立の共学の高校に通う2年生。
毎日毎日、眠気が一日を支配するだらけた奴だよ。
今日もとっても眠いんだ。
朝から授業なんかとっても行きたくないよ。
だけど、行かないと、うるさいんだよ、うちのママゴンが。
ほらほら、階段上がってきたよ、うるさいのがね。

……ガララ～

「寝る雄、起きなさい！」

「もう朝ですよ」

「ｚｚｚｚ」

「起きなさい！！」

俺はまだまだ寝れるというのに、ママゴンは大声張り上げて
無理やり起こしてくる。

たまんねぇ…。

「はぁ～～あ、ふぁ～～～～あ」

生あくびを何回もつく俺

何で学校なんか行かないと、いけないんだよ。

高校出ないと、良い大学出ないと、就職できないって～？
わーーってるよ、そんな事は。
だけど、そんなことが、どうでも良くなるくらい眠いんだよ！

「しゃーない、起きるか…」

俺は大きなため息を一つつくと、だらだらと、パジャマを脱ぎ始める。
いや、パジャマじゃない、そんなメンドクサイものには着替えないよ。
半そで半ズボンで寝てるよいつも…。

半そで半ズボンを脱ぐと、俺は学生服に着替え始める。
着替え終わると、次は洗面所だ。
もうこの辺で、かなりめんどくさくなっている。
その後に控える、食事、ママゴンとの会話、学校までの道のり
糞長い学校の授業。考えるだけで、眩暈が襲ってくるよ。

俺はママゴンとの話しを適当に、左から右に流すと
飯をついばみ、食い終えると、トイレに直行した。
ウンコは一日一回しないとね。
学校いくまでのバスに乗ってる途中で、腹痛何ぞ起こったら
冷や汗を書きながら、早くつけ～早くつけ～トイレはまだか～って
激痛に耐えながら、トイレの想い人になるのは確実だからな。

「ああ、すっきりんこ」

俺は洗面所で石鹸で手を洗ってタオルで拭うと
整髪剤を適当に頭に塗りたくって、頭の真ん中で分ける。
だせ！って思うだろ？

確かにダサいよ。でもさ・今時の流行の髪形なんか俺の眼中にはないのさ。
そんなもんに時間かけるくらいなら、学校休んだ方がましだよ。
休みたいな…。

「行ってきま～す」

「いってらっしゃ～い」

俺はママゴンにお別れを言うと、教科書入った重い鞄を右手に持ちバス停までやって来ると、椅子がないので、その場でウンコ座りをする。
おっせーな、早く来いよバス。
俺待たせるんじゃないよ。ちょっと遅れたら、怒涛のラッシュで俺を置いていくくせに。
待たせる時だけは一人前だよ、やれやれ。
お、きたか。
違うよ、別行きのバスだ…、しかし暑いな…。

コンクリートで出来た地面は、夏の日差しを受けて
朝だというのに、猛烈な熱気を地面から俺に向かって放出してくる。
うっとうしいくらいお喋りなクマゼミが、木の上のほうで安全を確保しながら
ジリジリ泣き喚く。

眠いよ～、早くバス乗って、机で寝たいよ～…。

学校へ・・

バス着たな。
俺は混み込みのバスに乗り込む。
は～やだやだ。
俺はバスの中へ入るなり、周りの白い夏用のカッターシャツを着た男どものなかへ
体を突っ込ませる。
これじゃ寝れるわけない。
お前等汗臭いんだよ、俺に障るんじゃねぇ…。

異様に男比率の高いバスの中で、俺は四方を固められ、もみくちゃにされている。
バスの中は、男臭い。腋臭の匂いが鼻につき、俺を不快にさせる。
バスが揺れるたび、白い背中が俺にとんでもない圧力をかけてきて
右に左へと俺の体を押し曲げる。
俺はこのだるい環境で、時間を長く感じるのが大嫌いなんで
手すりに右手をかけると、右手に頭を擦り付けて、なんとか立ったまま寝ようと試みる。
意識が微妙に眠りの世界に足を踏み入れてるかんじだけど、バスが揺れるたび
俺の手の筋肉をひっぱり、暑苦しい男達の体が俺を押すもんだから
その都度俺はこっちの世界に戻される。

まだか…。
早くつけよ。
俺は眠いんだよ…。

一人二人と、主婦や、リーマン、年寄りがちらほら降りていくがしかし、この混み込みな環境を代えるほどじゃない。
俺の学校に行くまでにある那須蚊高校（男子校）の奴等が、大半を占めるこのバスは
奴等が排出されないと駄目だ。

「キィ〜〜！」

また止まりやがった。
眠い。
後何回止まれば…？
お…？

那須蚊高校の奴等が、ゾロゾロ降りていく。
奴等が降りた後は、空席がちらほら空くほどバスにゆとりが出来る。

アァ、やっと空いたか。
前の方の席に座るぞ。

空いた右側の運転手の後ろの席に、ターゲットを絞ると
他人に取られまいと、早足で席に駆け込み、ドスっ音を立てて座る。
カバンを置き、右壁に体を委ねると、目を閉じ、意識を微妙に現実世界と繋ぎながらも
浅い眠りに入る。

何分、夢と現実の世界の狭間で浮遊してただろうか…。
なんとなく、バスに設置されている電光板を俺は見た。
げ、飛鳥高校って書いてるじゃん。
降りなきゃ…。

脇に置いているカバンを握り締め、焦りながら立ち上がる俺。
運転手待つんだ！
早まるんじゃない…！
俺は速攻、出口に駆け寄ると、危なくバスを発進させようとした運転手に向かって、定期券を突きつける。
ギリギリセーフだ…。
発進してたら、こいつは安全のために、俺の訴えを無視して次の駅まで俺を輸送してたはずだ。
俺は運転手に上辺だけの愛想笑いを浮かべ、会釈すると、バスを降りた。
細い道路の横にある歩道を、学校に向かって、フラフラ歩き始める。
今日は１時限英語か…。
頭に初めの授業を思い浮かべる。その授業を担当する禿げた先生の顔も、同時に頭に入ってくる。
まぁ、あいつなら、余裕かな、じいさんだし…。

俺が寝るにはそれなりに、壁になるものがある。
一つは先生、これにより、授業中で寝るための難易度が増す。
やけに、目ざとい奴。きょろきょろする奴、周りを歩き回らないと気がすまない奴。
問題を出して、すぐに当てたがる奴。
色んな奴がいるから、大変だ。
そして、もう一つ重要なのが席の場所。
目立つ席に寝てると、即、先生に注意され、詰られ起こされるのは目に見えている。
俺はそういうのを計算にいれて、きちっと席順を決める時、念入りにやったよ。
うちは、くじ引で、席を決めるんだが、適当に周りの奴と話し合い俺の求める席に座る奴と裏取引をして、今の席を獲得した。

俺が求める席とは…？

まず、最前列と最後部列、これは却下。
絶対だめ。
一番左の縦列も、右の列もだめ。そういう席に限って先生は目ざとく見てるからだ。
中途半端な位置がいい。
例えば一番左の列から2番目の列の、後ろから2番目辺りとか。
こういう位置がいい。
そしてできるなら、俺の前に座る奴はデブか、体の大きい奴が理想。
大きな肉壁で、俺を先生の視線から遮ってくれるからな。

はぁ、学校が近付いてきた…。

ゾロゾロ俺の周りを、似たような格好の奴が歩く。
俺は門をくぐると、暑苦しい構内を教室に向かってひたすら歩く。
振り返らない、立ち止まらない。
もう、俺は自分の席へと一直線の道しか頭に描いていない。
教室が密集する廊下を歩いてると、騒がしい男女の声が俺の耳に届くが
そんなものは気にしない。
そんな俺の後ろから、女らしき声が俺の名前を呼んできた。

「よ、寝る雄、おはよ」

ん？誰だ…？俺の名前を容易く呼ぶやつは。

制服姿の女、そいつの名前は水木千鶴。
いつも俺に声を掛けてくる、変な女だ。
髪は肩まで伸ばし、栗色の髪、覚めた細い目、小柄な女。

何か世の中を知り尽くした、冷めたオーラがみたいなものが出ている。
千鶴は俺の顔を見ることなく、平行して歩きながら、俺にごちゃごちゃ言ってくる。

「寝る雄、遅れるぞ」

「わーってるよ」

「そうか」

「じゃあ私は先へ行くぞ」

「さいなら」

軽く挨拶を俺と交わすと、歩くスピードを上げ、先へ先へと歩いていく。
俺より先に教室の中へ、スタスタ入っていくのが見える。
その後姿をぼけ〜っと見つめながら、俺も教室のドアの前までやってきた。

授業・・

俺はドアを開けた。
席は一番左から2列目の後ろから2番目の席だ。
やっと寝れる…。

騒がしい奴等を掻き分け、前かがみ気味に自分の席に邁進する俺。
途中俺の存在に気づいた奴等が、友達との談笑を中断して、一瞬息を呑んで俺を見つめる。
そんなことはどうでもいい。
自分の席に着くと、カバンを机の右にぶら下げ
ガバッと両手を机に抱きつくようにして交差させると、その上に頭を置いて眠りにつく。
あぁ最高…。
授業が始まるまでは寝るぞ…。
俺は周りの様子なんか気にも留めず、ひたすら寝ることに集中する。

◆◇◇◆

「おい、寝る雄来たぞ」

「今日どんなかんじよ」

「おい、武、話してこい！」

「え・・・俺がか・・・？」

俺の名前がクラスのあちこちでヒソヒソ囁かれる。

異様な空気の中、突然誰かが、人々の間を縫うように歩き教壇に立つ。

「静まれ～」

「皆の衆」

「お、千鶴が何かいうぞ」

「みんな静かにきくんだ」

千鶴がクラスの奴等に呼びかけると、みんな急に静まり返ってその言動に耳を欹てる。

「ノーマル！」

千鶴は教壇にたってそう一言発した。
その言葉と同時に周りの奴等に活気が戻る。

「おぉ、良かった」

「でよ～、昨日さ～」

さっきまでの空気の重たさはなくなり、談笑を再開する人々。
そんな出来事など、まるで知らずに俺は眠り続ける。

「起きろ…」

「こら！」

「ん？」

「あ、先生…」

俺の快適な眠りを打ち破ったのは、３限の桐生権三、国語の教師だ。

「あ、おはようございます」

寝たまま顔を上に向け、俺に怒鳴る権三に挨拶する俺。

「お前何しにきてんだ」

「勉強しにです！」

俺はその場を取り繕おうと、カバンから国語の教科書とノートを引っ張り出し

背筋をピンと伸ばし、先生をまっすぐ見つめる。

「それができるんなら、最初からやれ馬鹿者」

そう俺を罵倒すると、権三は教壇のほうへ歩む。

あぁやだやだ…。

今日アイツの授業があったんだった。

前かがみにふてくされた顔で、鉛筆をもち、教壇を見てる振りをする。

「今日はついてないね、寝る雄君…」

横から俺に囁いてきたのは、同じクラスの志賀真由美。

長髪にロンゲ、少し茶色に染めていて、ボインで美形の女だ。

「ついてないよ、本当に・」

俺はそう言葉を真由美に返すと、シャーペンの芯をカッターで削り黒い粉を製造し始める。
その行為に意味はない、ただ暇だからやってるだけ。

…キンコンカンコーン

「お、終りか」

「じゃあ、みんな、今日やった事復讐しとくように」

「はーい！」

「きりーつ、れい、着席〜」

俺は形だけの礼を済ませると、抑えてた眠気に潰されるように机にまたしがみついた。
もうしばらく。俺を起こすような目ざとい奴はいない。
体育の時間まで寝るぞ…。
しかし、俺はなんでこんなに眠いんだろ。
やっぱ、あれのせいかな？
アレのせいに決まっている。だっておかしいよな？
朝起きてからずっと異様なまでな眠気が、俺を襲ってるくるんだよ。
これは何も今日だけの話しじゃない・・
昨日も一昨日もその前もずっとなんだよ。
たぶん、あの時起こった事件が、俺をこんな風に変えてしまったんだ。
全ての気力を根こそぎ奪い、沸き立つような眠気を俺に残した事件。

あれがなければ、俺は今頃……。

過去編。（前書き）

妄想全快で書いています。

過去編。

そう、あれは俺が高校一年の飛鳥高校に入学したての春……。

あの頃の俺は、死の物狂いで勉強し、なんとか合格できた飛鳥高校で
楽しさ満載の学園生活を送るための準備を進めていた。
周りの奴等とのコミュニケーションを怠らず、数人の男友達を確保し
男にとって不可欠な彼女を手中に収めるため、まめにクラスの数人のかわいい子を
リストアップし、声を掛けることに余念が無かった。

最初に狙いをつけた晴海ちゃん。
ふわふわしたショートカットがとても似合うかわいい子だ。
俺は隣の席に座る晴海ちゃんに、話すきっかけを作るためにどんな機会も見逃さないように、神経を尖らせていた。

国語の授業が終わった直後。
彼女の鉛筆が机から零れ落ちた……。
俺はその瞬間を見逃さなかった。

「晴海ちゃん、鉛筆落ちたよ～」

「ありがと～、寝る雄君」

爽やかな笑顔をわざとらしく顔に浮かべ、晴美ちゃんと視線を合わす俺。
彼女は素直な笑みを浮かべ、俺に礼を言った。

よし、俺の優しさを覚えこませたぞ…。

休み時間になると、晴海ちゃんにありったけの勇気をこめ言葉をかけた。

「晴海ちゃん、この問題分かる？」

「え・・どれ～？」

「これだよ」

「うん、これはえっとね～・・」

「こうでしょ」

「ふんふん」

俺は数学のどうでもいい問題を見つけて、馬鹿を装って晴海ちゃんに教えを請う。

彼女が頭がいいのはもう調査済みだ・・そして面倒見がいいのも分かっていた。

こんななんでもない事から、距離を縮めていくのが俺のパターンだ。

そして、程よく日にちが過ぎた１０日目の昼休み。

俺は晴海ちゃんに重大な質問を投げかけた。

「晴海ちゃん～」

「な～に？寝る雄君」

「晴海ちゃんって彼氏いるの？」

「いるよ」

いるよ、いるよ、いるよいるよいるよ…（エコ～）
俺の最初の恋は、その一言で一瞬にして崩れ落ちていった…。
落ち込んだぜ、あの時は…。
　何日か飯が喉を通らず、晴海の天使のような微笑を頭から
消し去るのに必死な日々が続いた…。
毎日毎日、学校で顔を合わすわけだから、その苦難は想像を絶する
ものだった…。

　晴海ちゃんの席は左隣の席なため、全く会話をしないというわけ
にはいかない・
些細な言葉を交わすだけでも、俺の心は悲鳴をあげていた。
彼女に諦めをつけるため、なけなしの力を振り絞り、周りの女を物
色するが
同じクラスにいる女達に、中々矛先が向かわなかった。
初めに恋をした晴海ちゃんのレベルが、あまりにも高すぎたからだ。
どの子もなぜか、くすんで見える。
だが、そんな時。
俺に優しく声を掛けてくる女がいた。

「寝る雄君、放課後一緒に帰りませんか？」

　水を持たず、砂漠を行き先も分からず歩いている俺に
突然オアシスのごとく現れた女。

水木千鶴……。

小柄で、栗色のパッチリした目に、かわいい小さく纏まった鼻
透き通るような声・ささやかながらも適度に膨らんだ胸。きゅっとしまったウエスト。
晴海ちゃんほど美人では無かったが、俺の恋心を、再度呼び起こすには充分な女だった。

「へ～千鶴ちゃんか」

「同じクラスにいるのに、知らなかったな～」

「あはは、私地味だから」

「そんなことないよ、俺が見落としていたんだよ」

帰り道、俺は千鶴と歯の浮くような会話を交わしながら、彼女の地味だが
自分を飾らない、率直な物言いにだんだん惹かれていった。

俺は一緒に帰った次の日から、積極的に千鶴にアプローチしていった。
休み時間に何かのきっかけを見つけては、彼女のいる席に足を運ぶ。
彼女もそんな俺を、迷惑がらず、優しく迎え入れてくれた。
日にちを重ねるごとに、俺は彼女との距離を徐々にだが
確実に縮めていっている事を実感していた。

「明日、遠足だって！寝る雄君」

「そうなんだ、明日晴れるといいね」

「うん！」

「楽しみだな～、私山大好きなの・・」

「奇遇だな～、俺も好きなんだよ」

「気が合うね～」

「明日休憩時間自由だから、一緒に弁当食べようね！」

「ＯＫ！」

俺たちは良い感じだった。

周りからみても俺達は恋人に見えただろうな。

晴海ちゃんが隣にいても、もう全く気にならなかった。

だって、俺には千鶴ちゃんという子が傍にいてくれるから…。

過去編　遠足。

遠足の当日、始業時間に運動場に生徒達は集まり
先生から注意事項を聞いた後、この学校から北に５ｋｍほどにある
小枝山を登ることになっている。

運動場には生徒たちが縦列にクラスごとに並んでいた。
１クラス２列、右は男の列、左は女だ。

「なにやら曇っているけど、雨降らないだろうな～？」

「大丈夫じゃね？」

「昨日、あれ見たお前？」

「おぉ、見た見た」

周りの奴等は、少し黒い雲が、空にちらちら点在しているのを見て
雨が降るんじゃないかと囁いたり、ＴＶの話や、どーでもいい話で
ピーチクパーチク囀(さえず)っていた。

「寝る雄、お前、あれ持ってきた？」

「あれって何？」

「携帯ゲーム」

「もってこねーよ」

「そんなん見つかったら、すぐ取り上げられるだろ？」

「それもそうだな」

俺に声を掛けてきたのは、中学校からの友達、安田博
短髪の頭に…、特に目立った特徴のないゲーオタ。
言っちゃ悪いが、この時、奴のことはどーでもよかった。
前方にいる、千鶴ちゃんの事で頭が一杯だったからだ・・

「お前等、集まったな」

「出発するぞ、纏まって歩けよ」

「はーい！」

俺達にそう声を掛けたのは担任の桐生権三、国語の教師でもある。
さぶちゃんカットの毛深いゴリラのような男。
俺達は奴の後を、縦列で付いていく。

千鶴ちゃんは小柄な体格のため、最前列を歩いていた。
そして俺は…、１８５という比較的高い背が災いして
千鶴ちゃんのはるか後方にいた。
この時ばかりは親を恨んだぜ…。

…昼飯時間まで我慢だ、じっと我慢の子。

千鶴ちゃんの顔が、俺の前を歩く男子の一部が、縦列を乱すたびに
ちらちら俺の視界に入ってくる。
後ろの女友達と、楽しそうにご機嫌で喋っている。

その談笑の間に、こぼれる天使のような笑顔が、俺を穏やかな気持ちにさせる。

…あぁ、俺も千鶴ちゃんの隣に揃って歩き、楽しく話せたら遠足に費やす移動時間のほとんどを、バラ色の時間へと変えれるだろうに。

そんなことを妄想しながら、俺は時々、話題を振ってくる奴等に適当に言葉を返していく。

「寝る雄ってもてるだろ？」

「そうでもないよ」

「そうか？背も高いしさ」

「それに、クラスじゃ噂だぜ」

「何が？」

「水木千鶴とつきあってるって」

！？

驚くほどでもないが、微妙にインパクトのあるその会話は、俺の心に揺さぶりをかけた。

付き合う？付き合っているのかな？俺達…。

休み時間一緒に喋ったり、放課後、並んで歩いて帰ったりその姿は恋人同士だと、言われても不思議はないはずだ。

でも、まだ告白はしてないんだよな…。
それで、付き合ってるって言えるんだろうか？
周りから恋人同士に見られても、そんなものは意味がない。
千鶴ちゃんが俺をどう思っているかだ。
ただの友達止まりと考えているのか…、それとも…。

「……」

「おい？どうした寝る雄」

右手を頬骨に当てながら、物思いにふける俺に
博が、前見えてないだろと言わんばかりに、手の平を俺の顔のあたりで、ひらひら振っている。

「なんでもないよ…」

「そうか？悩み事あるんなら、なんでも言えよ」

博、お前はいい奴だ。
それは俺が一番よく分かっている。
しかし、彼女いない暦＝年のお前に、俺の悩みは荷が重過ぎる・・
済まないな。

「おう、ありがとな・」

俺はそう一言発すると、博の右肩に手を回しポンポンと叩く。

一行は、山の入口に差し掛かると、昼飯を食う予定の森林公園めざして
４５度くらいの傾斜がある山道を突き進んでいく。

足元には木々の折れた残骸、葉っぱ、砂利などが見える。
たまに、なに食ってんだよってくらい、丸々ふとった毛虫が
出現し、モスラのように地面を這っている。
俺達はそのグロい姿をした生き物を、奇異な眼差しで一瞥すると、
巧みに交わし
慎重に山道を登っていく。
奴等も生きるのに必死なんだ…。

足が重い……。

もう、どれくらい歩いただろうか、俺達はだんだん喋る回数を減らしていくと
無口になり始める。
たまに現れる広場が、俺達を期待させるが
前を歩く先生どもが、そこを素通りするたびに、それは落胆に変わっていく。

「おい、どこまで行くんだ?」

「さぁな…」

「おい、着いたぞ、みんな!!」

突然前の方から、権三の最後尾まで聞こえるであろうと思わせるオタケビのような声が、山々に響き渡る。

「おお、着いたぞ!」

「飯だ〜飯!」

「お前達焦るな！」

その声を耳にし、修験者のように静まり返って歩いていた俺達に活気が沸きたつ。

やっとか、長かった…。

俺の、パラダイスタイムが今始まろうとしていた。

過去編、遠足２（前書き）

面白い文章試行錯誤しているうちにくどくなっていく・・調整中・・

過去編、遠足2

俺達は先生に、この後のスケジュールや注意を受けると
昼飯タイムに入っていった。

生徒達は、仲の良い奴等と固まり、公園の広場に大小さまざまの
集落を作っていく…。
もちろん、俺にも男達がむさ苦しいパーティに、誘うべく声を掛け
てきた。

「寝る雄一緒に、食わないか？」

「ん？あぁ……」

「そうしたいのは、山々なんだけどな～」

「ほら、俺、これとよ」

小指を立てて誇らしげに見せ付ける俺。
奴等はその仕草をみて、敏感にその意味を察してくれた。

「あぁ……そうだったなお前には…」

「悪いな、また誘ってくれよ」

「おう、じゃあな」

……済まないな、今日だけは駄目なんだよ…。

これからも、駄目な時は雪ダルマ式に、増えるかも知れないが
それは臨機応変に、やって行くぜ…。
男友達も必要だからな、色々とな。
俺は奴等に手を翳し、一時の別れを告げると
千鶴ちゃんの姿を探す。

…あれ…何処行ったかな？

「寝る雄君！」

「あ、あれ」

「いつの間に後ろに～？」

「あぁ…寝る雄君男子と話してたから…」

俺の背後から、突然声を掛けてきた千鶴ちゃん。
どうも、俺が男達と喋っている時から、待っていてくれたようだ。

…千鶴ちゃん…良い子だな～…。

空気は読めるし、俺の嫁にしたい。
ちょっと俺の意識は先走りすぎて、未来で彷徨っていた。

「ごめんな～、待たせちまって」

「何処で飯食おっか？」

「えっとね～、あそこのベンチ空いてるよ」

千鶴ちゃんが指指したベンチ…。
地面に風呂敷広げて、飯を食う男共から、痛いほど視線が飛んでき
そうなその場所は、
さながら、見世物小屋の檻と言ったところか。とても俺の意図する
場所とは、程遠かった。
…済まない、千鶴ちゃん。そのベンチだけは許してくれ…。

「あっち行かない…？」

「うん…そうしよっか」

俺の訴えるような眼差しを、察してくれたのか
千鶴ちゃんは、すんなり場所の変更を承諾してくれた。
俺達は、集落の郊外に足を運び、良さそうな場所を探していた。

「このベンチはどう？」

「いいね」

どうも、千鶴ちゃんは、風呂敷で地面に座るより
ベンチに座りたいようだ。
…俺としては、風呂敷で女座りする、千鶴ちゃんの横で
空を仰ぎながら飯を食うのも、それはそれで趣があると思うけど
な。
俺達はバッグから弁当を取り出す。
母ちゃんが朝早くから作ってくれた弁当。

…果たしてその中身は？

弁当というのは、ある種のビックリ箱だ…
たまに、母ちゃんの気分次第で、とんでもない爆弾が入っている場合がある。
過去のワースト3の一つを思い浮かべてみる。

…白いご飯に……、メザシ3匹が溺れるように、頭から突っ込んでいた弁当……。

もちろん、おかずはそれだけだ。
あれは、酷かった、あんな物を周辺に晒す俺の醜態を、母上は分かっちゃいない…。
俺は思い切って弁当の箱を、渾身の力を篭めて剥ぎ取る。
目に入ってきた物を恐る恐る分析していく。

…おぉ、白いご飯に、鮭、玉子焼き2切れ、アスパラ、ミートボール、蛸さんウィンナー
そのラインナップは、まさしく王道弁当と呼ぶに相応しいものだった…。

「寝る雄君の弁当すごいね！」

「私は時間なくって、パン屋さんでサンドイッチ買ってきちゃった」

「いいなぁ…」

千鶴ちゃんの目に少し影が差したのを、敏感に察知すると
優しい言葉を投げかける。

「ちょっと食べてみる？」

「え…いいの？」

「うん」

「ありがと～！」

俺の大好物の玉子焼きを、弁当の蓋に乗せると、千鶴ちゃんはそれを小さな指でつまみ、口に入れた。

…本等は「あ～～んして」とか言って、箸でその可愛い小さな口に優しく押し込んであげたかったが、自粛した…。

「おいしい～！寝る雄君のお母さん、お料理上手だね」

そうなのかな…玉子焼きと言えども、ピンキリなのか

まぁ、うちの母ちゃんの晩飯見る限りじゃ、うまい方だとは思うがな。

過去編３（前書き）

妄想５００％

過去編3

俺達は昼飯を食べ終えると、談笑をしていた。

「でさ～、バイト先の店長が言うんだよ」

「お前明日から来なくて良いよって」

「俺ぶちきれたね」

「ええ」

「なにやったの？」

「レジ打ち間違えちゃってさ」

「毎回大目に客から貰ってた事が」

「客からのクレームでばれたらしい」

自分の失敗を赤裸々に話す俺。
心象はいいはずは、無かったが、俺のドジなところも
知って欲しいという意図をこめて話す。
上辺だけの綺麗な付き合いを、俺は望んではいなかった。
そんなものは、付き合ってる最中にいつかばれるもの。
俺は早めの段階でそういうものを曝け出して、更に酷いと思われる

過去の悪行を話す時、幾分か軽減されるよう俺のイメージを
微妙に調整しながら、千鶴ちゃんの脳裏に刷り込んでいく。
その際、馬鹿に見えない程度に、微妙に反省しながらも、明るく話すのが
コツといえばコツだろう。決してネガティブ会話になってはいけない。

「人間だし、失敗はあるよね～」

「まぁ、そうなんだけどさ、店長ってのも大変だよな」

「俺みたいな馬鹿、いっぱい取り仕切って、利益あげてくんだからさ」

「かもね～だけど、寝る雄君はバイトしてるだけ、偉いよ」

「私なんか、まだした事無いしね」

会話のさほどうまくない俺は、多少会話がマイナーな方向へと入っていく事は
良くあることで、ここで軌道修正は欠かせない。

「バイトなんてさ、いつやってもいいんだよ」

「それに、俺が千鶴ちゃんのお父さんなら、バイトなんかさせないな」

「だって、絶対男がわんさか擦り寄ってくるの、目に見えてるしさ」

「千鶴ちゃんってかわいいからね」

「ええ、そうかな～？」

俺のその言葉に頬を赤らめながら、照れくさそうに俯く千鶴ちゃん。

木の陰に覆われたこの場所は、ひんやりした空気が辺りを包む。

家の周りでは味わえない木々の香り、澄んだ空気、時々俺達の周りに飛来する虫達、この大自然の中で、俺達は二人、同じベンチに座って楽しい会話を交わす。これ以上の幸福が他にあるだろうか？

時を忘れ、彼女と楽しい会話を交わしている間にも

俺の頭の中には、次の目的がちらちら、頭をよぎっていた。

…どこか静かな場所で告白をしよう…。

これは、何も今になって思いついたわけではない。

俺は自然の多い場所で告白する事を、昔から夢見ていた。

浴衣を着た彼女と、水路に沿った田んぼのあぜ道を

月の光を浴びながら散歩をする。

俺達の周りに生える稲の穂先に、薄っすら光るホタルを見ると

立ち止まり、彼女の肩に手を優しく回すと一言言葉を伝える。

「君が好きだ…」

こんなシーンを子供の頃、なにかのドラマで見た俺は

ずっと憧れていた。

この場所は田んぼのあぜ道でもなければ、夜でもないし、ホタルもいないが

自然に囲まれていると言う事だけは、一致している。

そんな思いもあって、遠足があると聞いたとき、俺は告白をする場所はここしかないと
決めていた。
山を降りてしまうと、また俺達は引き裂かれ、長い長い山道を行者のように
歩くことになってしまう。
その前に、後３０分の短い間に、彼女と雰囲気の良い場所へ移動し、告白しなければ…。
俺は焦っていた。

「な～、綺麗な花が咲いている、静かな場所に移動しない？」

「綺麗な花？」

「うん、探せばどこかにあると思うんだけどさ」

「行ってみない？」

「いいね～、今ならアジサイが咲いてそうだよ」

「そっか、探そうよ」

「うん」

俺達は顔を見合わせ、互いに笑顔を浮かべると、ゆっくり立ち上がり
理想の場所を捜し求め、辺りを散策し始めた。

過去編　告白。

俺達は公園の奥まで足を踏み入れていく。
公園とはいえ、山の中にあるその場所は、鬱蒼と木々がしげり
土と砂利の道が永延と続く。しばらくすると、道を挟むようにして
生えている木々の中に、鮮やかな綺麗な青い色をした紫陽花の群集が
目に飛び込んできた。

「綺麗～」

「ほんとだ～」

その紫陽花の美しさにしばらく目を奪われる俺達。
俺はふと我に変えると、告白の事を考えながら、今いる場所を
確認し始める。

…周りに人気なし。
しかし告白の場所にするには、ちと何かが足りないな。

花に携帯を近付け、写真撮影をする千鶴ちゃん。
それに参加するべく、気さくに声をかける。

「ねね、俺もとって～」

「いいよ～」

カシャ……。

「千鶴ちゃんもとってあげる」

「笑って～」

カシャ……。

しばらく、和やかな撮影時間を楽しむ二人。
もう少し、場所を探すか…。

「ねね、もう少し向こう行ってみようよ」

「うん、いいけど、あまり離れすぎると、集合時間に間に合わなくなるよ」

「ちょっとだけさ・・」

「じゃ、ちょっとだけ行ってみますか」

「うん！」

また止めてた足を進行方向に向け、ゆっくり歩み始める。
木々に囲まれ、少し薄暗いその道は、薄っすら冷気が漂い
寂しさすら俺達に感じさせる。

…まずい、このままでは……。

俺が諦めかけて、戻る事を告げようとしたその時
前に明かりが差したかと思うと、広い場所に出てくる。

「大きな池～！」

木の柵の先には、薄い霧がかかって白くぼやけているが
確かにそこには大きな池が確認できる。
足場の近くを見ると、水は比較的澄んでいて、蓮の葉や藻みたいなものが
池の表面を所々覆っている。その隙間から、鮮やかな模様をした何匹かの鯉が
泳いでいるのが目に入る。俺達のほうに気づくと、口を水面に突き出し
パクパクさせて近付いてくる。どうやら、普段から餌付けはされているらしい。
だんだん慣れた調子で、水面にそのパクパク口が数を増やしてくる。

「かわいい～！」

「うん、慣れてるね」

「よし」

俺はカバンの中に手をつっこむと、中の物をかき回す。
棒状の箱が手に当たると、それを掴み外に出した。

「このポテトチップスのカケラを投げてみよう」

「ええ・・」

「いいのかな？」

「いいんじゃない？」

俺はそう言うと、ポテトチップスを小さく割った物を池の鯉に向か

って
投げつけた。

「あぁ、食べてる食べてる！」

鯉たちは、奪い合う様に餌が落ちた辺りに、池の表面を波立たせ集まりだす。
幸運にもそれをゲットした鯉が、そのカケラを吸引機みたいに口の中へと
滑り込ませる。
その姿を無邪気な微笑みを顔に浮かべ、愉しそうに見ている千鶴ちゃん。

…ここしかない。
時間もあまりないし、周りに人気がない上に、前は池。
理想に近い場所じゃないか！？
よし、決めたぞ！ここで告白する！

俺は決心を固めると、どういう風に告白に持って行こうか
愉しそうに池を眺める千鶴ちゃんを横目に、頭の中で会話の
組み立てを始める、

…難しいな、考えれば考えるほど、告白から遠ざかる。
こうなれば、何も考えずに、素直に思った事を言葉にしてみよう。
一か八か、行き当たりばったりではあるが…。
俺の生まれ持った野生の感覚に全てを賭けるぜ！

そう決断した俺は、千鶴ちゃんの近くに体をジリジリ近づけ
どんな声も届く距離を保つ。
そして告白への会話の口火となる言葉を切った。

「千鶴ちゃん」

「ん？」

「な～に？」

「お…」

…寝る雄、ケッパレ！

「俺さ～、この山きてからさ」

「いや、来る前からなんだけど」

「ずっと、千鶴ちゃんに言おうって思ってた事あってね」

照れ臭そうに、拙い言葉を口にする俺を、千鶴ちゃんはキョトンとした目で見ている。

しかし、やがてその雰囲気を悟ったのか、千鶴ちゃんが顔を俯き、上目使いでこちらを見つめだした。

…この反応は脈ありと見ていいのか？

よし、言葉を続けるぞ。

「俺、千鶴ちゃんに初めて声かけてもらった時」

「ほんと嬉しかったんだ…」

「そして、その後も一緒に色々話しているうちに」

「ある事に気づいたんだ」

最初淡々と話していたが、言ってる事の恥ずかしさに途中で気づかされ
胸の高鳴りは最高潮に達し、言葉に詰まった。
しばらく、沈黙が二人の間に流れる。

…後一歩なのに、言葉がでねぇ…。

そんな静寂を破るかのように、千鶴ちゃんが静かに話し始める。

「わ、私も同じクラスにいる寝る雄君の事…」

「いつの日からか、気になり始めて…」

「あの時、勇気出して声掛けに行ったの」

「話して見ると、思ったとおり優しい人で…」

「私、その……」

「待って！！！！」

俺は千鶴ちゃんから、その先の言葉を聞くわけにはいかなかった。
これでも、堅実の父に男というものが何かという事を
教えられ育てられた俺には、それなりにポリシーや理想というものがあって
その一つに、告白の言葉は男から言わなければならないという、確固たる座右の銘を

持っていた。

「待って…」

「俺の口から言わせて」

俺の真剣な表情と決意の篭った言葉を受け止めると
千鶴ちゃんは目を俺に向け、静かに無言で頷く。
息をスーッと一回吐き、軽く息を長めに吸うと
思い切って言葉を発した。

「最近気づいたんだ」

「千鶴ちゃんの事が、ずっと気になり始めてる自分に」

「……」

「千鶴ちゃん」

「好きだ！！！！」

…ついに言っちまった。

過去編　兵どもの夢の跡！

俺は当等告白しちまった…。

「私も好きだよ」

…やった～、俺達はこれで相思相愛！
千鶴ちゃんは今日から俺の彼女だ！

「千鶴ちゃん～！」

俺が嬉しさの余り、彼女に抱きつこうとしたその時…。

「やっと告白させたわ」

「え？」

「もう一回いって」

俺は一瞬聞き間違えたのかと思い、さっきの言葉を聞きなおす。

「だから…、あんたはもう私の彼氏だって言ったの」

「あんた！？」

俺は突然言葉が変わった千鶴ちゃんの顔を、恐る恐る覗き込んだ。

「あれ…！？」

確かに千鶴ちゃんの顔かたちをしているのだけれど
何かが違う。

「その目、どうしたの？」

…目が何か違う、さっきまでの優しいパッチリした眼が
何か冷めた細い目に変わっている……。

「ん？これがノーマルだけど？」

「ふ～」

「面倒くさいけど…」

「説明くらいしてやるか」

「簡単にいうとだな、寝る雄は私の術中にはまって、まんまと告
白したわけだ」

「ほへ！？？？？」

俺の頭はまだその事態が良く飲み込めないでいた。

「私はこのクラスに来た時」

「寝る雄、あんたに目をつけた」

「そして、私から声を掛けにいったんだよ」

「あなたを物にするため、私は独自の顔面術を用いて」
「可愛い顔とキャラクターをずっと演じ続けてたんだ」
「おかげで、今は反動で肩が凝って凝って…」
「でもそのおかげで、寝る雄は今日から私の彼氏よ」
「ほら、証拠録音も」
千鶴はポケットに隠し持っていたテープレコーダーを出した。
「パチ…」
『千鶴ちゃん、好きだ』
「ホゲ！」
俺は目ん球ひん剥いてそれを見つめる。
「ま、そう言うことだから」
「これからよろしく、寝る雄君！」
千鶴は細い目で薄笑いを浮かべ言葉を投げかけると、スタスタ集合場所へと一人で戻っていった。
「……」

俺は宇宙(そら)を眺めていた…。

◆◇◇◆

何分経っただろうか、しばらくすると俺を呼ぶ声が耳に入ってくる。
しかし俺は動けなかった、いや動きたくないというのが正解か…。

「おい、寝る雄」

「お前探してたんだよ」

「もう、山下りるってよ」

「どうしたよ?」

博が俺の真白になった亡骸の顔の前で、手をひらひら振っている。
無理やり停止していた感情が、怒涛のようにこみ上げてくる。

「ひ、博…」

「ん?」

「博〜〜〜〜〜〜!」

ガバ…。

俺は博にしがみ付くと、大泣きをした。
人生でこれほど泣いたのは、ばっちゃんが餅を喉に詰まらせて

死んだとき以来かもしれない。

「どうしたよ…？」

「ふられたのか？」

俺は何も答えず、ただただ博に顔を押し付け泣いていた。

「気持ち悪いって」

「……」

「なんかあったんだな…」

「事情は俺には分からないけど」

「泣きたいときは、思いっきり泣けばいい」

博は俺の様子をみて何かを感じ取ったのか、優しい言葉をかけると、黙って俺の頭に優しく手を置いた。

…博、お前って奴は…。

お前だけは一生涯親友だよ。

5分ほど博の胸元で泣いていたが、しばらくして博が俺に言葉をかける。

「もう気が済んだか？」

「エクッ、ウゥ…」
おお泣きした後、鬱積した重いものが涙として、外へ流れていったのか
少しだけ歩くだけの力が戻ってきた事に気がついた。

「行こうか？」

「先生やみんなが待っているぞ」

「う、うん……」

「ちょっとまって」

俺は泣きじゃくった顔を、カバンからウェットティシュを出して目の辺りを吹きまくり
目の熱を冷まし、人様に見せれるような顔に戻すのに必死になる。
その間向こうに行く心構えを作るため、頭の中を整理し始めていた。

…千鶴ちゃんも、待っているんだよな…。

あそこにいるのは、もう俺の知っている千鶴ちゃんではない。
断じてない！もはや違う生物。
だけど、俺はこれからの長い学園生活を生き抜くため
この天変地異のような事態を乗り越えなければいけない。
やがて、逆境を跳ね返す堅牢な壁とは言いにくいが、それに少しは耐えれるであろう心の強さが少なからず戻ってくると、俺は博に声を投げかけた。

「行こう！」

過去編、葛藤。

俺は博と共に集合場所に恐る恐る近付いていく。鬱蒼としたジャングルで、敵陣キャンプへ奇襲をしかけようと近寄る兵士のような気持ちで…。

…集まっとる、集まっとる。

既に生徒達は列を綺麗に整え、その前に陣取る先生達の話を聞き入っていた。
俺は博と共に、その列へと紛れ込んでいく。
そしてターゲットを視認するため、列の先頭に目をやった。

…千鶴ちゃんはどこだ？
あ！いた…。
友達と談笑しているな。

もう、彼女はあの可愛い顔を演じてはいなかった。
素の顔で喋っているのが後ろからでも確認できる。
あの冷めた細い目が、彼女が横に顔を振るごとに俺の目に飛び込んでくる。
しかし、まだ信じられない…。
ついさっきまで、俺はマジで彼女に惚れてたんだ。
そして、今もまだ半信半疑で彼女の後姿を見つめている。
…ひょっとしたら・・どこかで頭を打ったのかもしれない。
もう一度何かの衝撃を与えれば元の可憐な千鶴ちゃんに戻るかも。

俺はそんな淡い期待を胸に秘めながらも、さっきのドス黒い千鶴ちゃんのイメージが
どうしても頭から離れないでいた。
…すると突然、野生の感が働いたのか、後ろを振り向く千鶴ちゃん。
俺は咄嗟に、前に立ちはだかる巨体の大俵君の影に潜み、その視線の範囲内に入る事を
拒否した。
…見られては駄目だ、今のあの子の目は神話に出てくる蛇女ゴルゴンと同じだ。
見られたら最後、俺は一瞬で石化してしまう…。

俺はさっきのとてつもない衝撃で、ガラスのハートに大きなヒビが入ったままの状態なわけで、とても、今彼女と会話を交わす事、見つめられる事に耐えれる状態では無かった。
とにかく、この満身創痍の心を癒すため、何事もなく無事に家に辿り着かなければならない。
家というオアシスで心と体を休め、また新たな力を蓄えねば、学校にすら来る事ができないんだ。それほど俺は弱っていた……。

「じゃ、みんな山下りるぞ、来た時と同じように纏っていけよ」

先生達の指示が拡声器から周りに伝わると、俺達はざわめきながらも
また山の階段を修行僧みたいにぞろぞろ降りていく。
登ってきたより、降りる時のほうが楽なはずのに、俺の足取りはとてつもなく重く
そして、小さなものだった。

俺は今日まで千鶴ちゃんの事だけを一途に思い、彼女に告白するためにこの山へ来たと言っても過言じゃない。その過程はまさに夢のような時間だった。
しかし、その全てが悪夢へと変わり、今では恐怖すら彼女から感じている。
そんな俺の様子を気遣ってか、博が後ろから声を掛けてくる。

「どうしたよ、さっきからびくびくしてさ…」

博は俺の落ち着かない様子を見て、和ませようと思ったのか、博独自の会話を展開してくる。

「なぁ、最近新しい格闘ゲーム出たんだよ」

「ゲーセンで毎日最近やってるんだけどさ」

「これが難しいんだよ、コンボが中々はいらねーの」

「そうだ、山下りたら、俺と対戦しないか？」

「いいけど？俺下手だよ」

「ははは、な～にお前ならすぐ旨くなるさ」

博はゲーオタだが、特にゲームの中でも格闘ゲームが奴のマイブームらしくって
毎日暇を見つけてはゲーセンに通い、腕を磨いていた。
奴の話に寄れば、幾多の格闘ゲームを既に制していて、ゲーオタ仲間の対戦では
無敗を誇るらしい。俺はそんな博の武勇伝をいつも誇らしげに聞か

されてきた。
それを聞くたびに、「たかがゲーム…」、「博、他に趣味見つけろよ」
「彼女作った方が楽しいんじゃないか」と言ったある種蔑みをこめたコメントを
返していたが、奴はそんな言葉に動じるような男では無かった。
自分なりの世界観と確固たる独自の理論を持ち合わせていて
それに異議を唱えようものなら、怒涛のごとく切り返し、相手をねじ伏せるだけの理論武装ができていた。
俺はそんな博に呆れながらも、「こいつはいつか大物になる・・・」
といつも心の底で感じていた。

博があんまり楽しそうに話を続けるもんだから、それを聞いているうちに俺まで楽しい気分にさせられて、だんだん千鶴ちゃんから受けた衝撃とそれに対する警戒心が、薄らいでいくのが分かる。

…博マジック！

気がつくと俺は既に山を降りていて、学校の運動場で先生達の話しを聞いていた。

「よし、じゃあ話しはこれまでだ、解散！」

「さようなら～」

先生のその一言で、蜘蛛の子散らしたように生徒達は、仲のいい友達と寄り固まり
学校の門から家路へと足を進める。
ゲーセンに行こうって話しになってはいたが、残念ながら俺は金をあまり持っていなくて

その話はおじゃんになり、博と一緒に普通に家に帰る事にした。
その間まったく千鶴ちゃんの事が頭から消えていて、心地良い疲れが体に広がり
博と話しながら爽やかな気持ちで帰宅するところだったんだ。
しかし……。

「寝る雄君〜」

「ん？」

「え…？」

俺を覆っていた清涼感が一瞬にして消え入り、恐怖が体を支配する。

「あ、博君と一緒に帰るんだ？」

「あ、あぁ」

その突然の自体に顔を強張らせる俺に、千鶴ちゃんは失われたかと思っていた
あの可愛い笑顔で、優しく声を掛けてくる。
…こ、これは、エラーを起こしていた頭の中のハードディスクが、正常に作動し元に戻ったと考えていいのか…？それとも…。

俺はその顔を覗き込みながら、額に冷たい汗を流し考えていた。
もしやという思いが頭に去来するが、それと同時に暗黒の本性が頭に浮かぶ。
その俺の様子を横で観察していた博が言葉を発した。

「おっと、邪魔者は消えなきゃな…」

「え？」

その博の空気を読んだ言葉に思わず肩に縋り付く俺。

…ま、待ってくれ。

今、この子と二人にされたら、俺は……。

過去編　衝撃の告白！

鬼気迫る思いで、博の右腕に腰を屈め前のめり気味に縋り付いていたが、その俺に
博は顔を近づけると苦虫を噛み潰したような笑みを浮かべ一言言った。

「頑張れよ…」

…いやぁ、置いてかないで、博…。

博が俺を振りほどこうとするのを、断固拒否した。

「おい、放せったら、彼女の前でみっともないだろ・？」

無言で目じりに皺をよせ、力一杯抱きつく俺

「なんなんだよ、ったく…」

「…　…」

「フ…」

突然、俺達の揉めあっている合間を縫って、「フ」が聞こえたかと思うと
一人でスタスタ歩いていく千鶴ちゃん。
その後姿は太陽を前にして俺達から見づらかったが
影がなが～く後方に伸びているのだけは確認できた。

…死神去る。

彼女が去った後の気分は、実に平穏な空気が流れ、いわば、悪党に支配された村の人達が
救世主によって救われ自由になった後、平和が戻ってきたことを祝って、みんなで喜びのコサックダンスを踊っているような、そんな解放された気分だったんだ。

「あ～あ、お前彼女にふられたかもよ？バッカだな」

「いいんだよ、これで」

俺は遠い目をしながら、空を夕焼け色に染める西陽を眩しそうに眺める。
その俺の落ち着き払った様子に、博も何か直感したのか、静かに俺の左肩をポンと
一回叩くと言葉を一つ掛ける。

「帰ろうぜ…」

俺達は沈黙を保ちながら帰路を辿る。
コンクリートで舗装された坂道をゆっくり並んで降りていくと
子供達がワーワー言いながら、前を横切っていく。
どこかの木でひっそり鳴く油蝉。
その音と夕焼けの紅い空はとても相性が良くて、俺の心を澄んだものへと
変えていく。
しばらくして、先に口を開いたのは、やはり博だった。

「俺さ〜、ゲーオタじゃん」

「だけど、ゲーオタだけど、男でもあるんだよ」

博は、目を細めながら含蓄のある言葉を急に口にすると続けた。

「正直言うとな、お前と千鶴ちゃんが仲が良い噂を聞いたとき」

「少し悔しかったよ」

「先越されたなっていうのが最初の印象さ……」

「でも、思ったんだよ」

「俺の親友を好きになってくれる女の子が、やっと現れたんだって…」

「お前を認めてくれる女がいる」

「そう考えたら、悔しいとか言ってないで、全力で応援するのが」

「本等の親友だってな・・」

…博、お前って奴は…。

俺は思わず目頭が熱くなったが、それを悟らせまいと顔を博と逆方向に向け

吹き付ける風でほのかに出た涙を乾かす。

俺は顔を凛と整えると、声が震えているのを分からせないように

静かなトーンで博に言葉を発する。

「博、ありがとよ」
「お前に彼女できた時は、俺も絶対応援するから」
「そうか、ありがと」
「でも実はよ…」
博の今までの口調と雰囲気が一変した。
「俺、既に好きな子いるんだよ」
「なに〜〜〜〜〜！？」
俺に激震のような衝撃が、頭から足の先まで走った。
すかさず、直、俺は聞いた。
「誰だよ！？」
「これがよ〜、とってもお前には言いにくいんだけど…」
「心して驚かないで聞いてくれよ」
「お前の良く知っている…」
「妹の雪乃ちゃんだよ」
…ええ、馬鹿な…。
いや、当たり前に知ってるけどさ、お前よりによって俺の妹に惚れ

たってか…。

俺には一つ年下の妹雪乃がいたのだ。
雪乃はどちらかと言うと、美人かな。
少し気が強く、はきはき物言うタイプ。
そんな雪乃に博は惚れたらしい。
そう言えば、、俺んちに来た時、なんか猫被ったように大人しくなる時あるけど
あれは、雪乃を意識しての反応だったのか・・・思い起こせば、思い当たる節はあった。
…兄として俺は困っていた。
博は良い奴だし、親友だ。しかし、引っ付けてやりたい気持ちもあるが
どこかやり辛い、血縁というのは、それほどやっかいなものだ。
まして、雪乃はあの性格上、ゲーオタである博を果たして受け入れるだろうか…？

「ははは、びっくりしただろ」

「いつかお前に話そうって」

「ずっと思ってたんだけど…」

「中々言えなくてさ」

「あ、俺ここで右曲がるから、じゃまたな」

この交差点で俺達の家路が分かれる。
衝撃の言葉を告げた博はどことなく、照れ臭そうではあるが
満足げな顔さえしているように見える。ずっと心に秘めて中々口に

出す事を
躊躇っていた事を、親友の俺に告げたのだ。しかも俺は兄貴…。
俺はいつもより大きく見える博の背中を見送ると、色んな思いが頭
を交錯しながらも
家に向かって歩き始めた。

過去編　兄　博　妹。

ふー…、何か色々ありすぎて疲れた。

「ただいまー」

「…　…」

誰もいないのか、そんな事はどうでもいいや。
取り合えず、心と体を休めなくては。
風呂場へ行くと、俺はシャワーを浴びる。
あの無意味に高い山を炎天下の中ずっと歩いてきたんだ。
体中の汗がこびり付く様にして、皮膚呼吸を遮っているような気さえする。
水シャワーを浴びて、石鹸で体全体をごしごし洗いながら
旅の疲れと汚れを一緒に洗い流す。この爽快感は、炎天下の中を歩いてきて
ふと立ち寄った、クーラーガンガンに効いた電気店に突然入ったときに
似ているかもしれない。
俺は適当に体についた水滴をタオルで拭い取ると、パンツ一丁でタオルを首に巻き
階段を上がっていく。
二階に上がっていく間に、母と擦れ違ったがそんなもんは気にしない。
上がりきった後、廊下に備え付けられた冷蔵庫の前に、胡坐掻いて座った。

…スポーツドリンクはっと、お、あった…。
俺はそれを一気飲みする。そんな間に俺の後方から部屋の扉が開く音がしたかと思うと
パンツ一丁の俺の尻に蹴りを入れる輩がいた。
妹の雪乃だ。
「こら、兄貴、そんな格好でうろつくなっていつもいってんだろ？」
「おう、すまん、俺は気にしないから、お前も気にすんな」
「あぁもう、屁理屈いってからに、そんなんだからもてないんだよ」
「う、うっせ…」
普段なら堪えないんだが、なぜか今日は身に染みる言葉だぜ。
もう俺には、千鶴ちゃんは既に過去の人となりつつあったので
またフリーの身に逆戻りだからな…。
しかし、こんな気の強い雪乃に、あの博が惚れるとはな…。
分からないもんだ。もっと優しい女が好みだと思っていたんだが。
「なぁ、雪乃よ」
「なによ」
「お前さ～博ってどう思う？」
「博君？うーん、ゲーオタだよね」

「うむ」

その通りだ…。

「他になんかある？」

「別に？」

いやぁ、思ったとおりだよ、博、お前のイメージはゲーオタ以外無いようだぞ・・

そうだ、もう少し掘り下げて聞いてみようか。

「ゲーオタってお前どう思うよ？」

「さぁ、なんとも思わないね」

「別にいいんじゃない？好きなことしてるんだし」

うむ、さすがにさっぱりした性格の雪乃。

これといった偏見や、蔑みはゲーオタには無いようだ。

うんうん、これは博にとって朗報だな。

雪乃が1階に降りていく。

俺は自分の部屋に入ると、扇風機の前に座り、その突風に体を浸す。

部屋の中は青いシーツを敷いたベッドが置かれていて、その隣には机。

更に隣に本棚、もちろんその中は漫画で埋め尽くされている。

テーブルが窓際にあるけど、そこにはパソコンが置かれていた。

とりあえず、博に携帯で連絡しとくか…。

プルルウプルルウ～ガチャ……。

『おう、博か？』

『寝る雄か、どうした？』

『お前よ、雪乃好きだって激白しただろ？』

『お、おう』

『あ…、お前余計な事いってねーだろな！！』

『言ってねーよ、でもちょっとばかし情報仕入れたぜ！』

『な、なんだよ？』

博の奴動揺しているな。奴の恋心は本気のようだ。
分かるぜ、その気持ち……。

『雪乃はゲーオタに偏見ないらしいぞ？』

『まじか…？』

『おうよ！』

『そうか…、ありがとな』

最後の博の声がどことなく安堵に満ちていた気がした。
たぶん、ゲーオタに偏見を持っていない事に安心したんだろうな・

アイツの夢は、彼女と一緒にゲームセンターで遊ぶことらしいから。
そんなゲーオタな博にとって、それに寛容である女である事は
自分の彼女として必須条件であるとも言える。
しかし、兄としては複雑な気分だ。
万が一、博と雪乃が付き合いだしたりしたら、親友だとは言え
なんかこう、言葉に言い表せない気持ちが襲ってきそうな…。
そして千が一、奴等が結婚でもしようものなら…。
俺は博から『お兄さん』と呼ばれるわけだし……。
そう考えると、いや俺どうかしてるぜ。
考えすぎだ…。

どうせ、無理だろ？

俺はこの時はまだそういう楽観的な気持ちでいたんだ。
しかし、これから加速度的に博と雪乃が進展していく事を
この時知る術はなかった…。

過去編　油断！

遠足の次の日、普通に学校の授業があって、俺は普段どおり朝起きると朝食をとり、家を出るとバスに乗り、学校へ着いたかと思うと、既に教室の引き戸の前に立っているわけだ。
さぁてと、まずは第一関門・・・何事も無かったかのように千鶴ちゃんがいる教室へと
踏み込み、俺の席に座る。この一見簡単そうなミッション…の落とし穴は何か？
それは、もちろん千鶴ちゃんの存在そのものだ。

昨日、俺は彼女の暗に訴えてくる、俺と二人で帰りたい電波を押し切ることに成功した。それは普通であれば、彼女との完全な破局を意味する。要は俺がふったも同然なわけだ。普通の女ならこういう場合、悲しみにくれ、俺が教室に入ってきたとしたとしても視線を合わせないように蹲っているだろう。そしてそういう日々が続き自然消滅が当然の成行きなわけだが…果たして千鶴ちゃん相手にそううまくいくだろうか？
正直言うと彼女は得体がしれない。行動選択も未知数で、俺が今まで会ったどんな人間よりも
不気味な存在だ。

俺がこのドアを潜った場合どうなるか？

予想１
何事もなく席につき、彼女を放置して、授業を淡々と受け家路に帰る事ができる。

予想２
ドアを潜った途端、血走った目をした彼女がナイフで襲い掛かってくる。
俺その場で血反吐吐き息絶える、享年１６歳　乙

予想３
何事もなかったように、千鶴タイプ１（可愛いほう）で和やかに俺に近付いてきて
ベタベタしてくる。

取り合えず、俺が考えうる予想はこれだけだ。
案外予想１が当たっているような気がするんだよ。
絶対そうだ。良くあることだ。
何か困難な事象に立ち向かう時、その前に悩み苦しんでいざやって見ると
とてもあっさりそれを乗り越える事ができる…。
人生には良くある話だ。そういうのを表す言葉に、塞翁が馬、当たって砕けろ、生むが易し
考える前に動けとか色々常套句があるよな。
そういうことだ。悩む必要は全くなし。
と言うことで、俺は扉の前で深く息を吸いまた同じだけ吐くと、教室へ踏み込んだんだ。

逝くぜ！オリャア！

「おはよう～寝る雄！」

「おっす」

「やぁ！」

「Ｈｉ！Ｎｅｒｕｏ！」
様々な友人からの挨拶が、俺へ向けて矢のように放たれる。
それに言葉と笑顔を返しながら、わが席へと足を運んだ。
ほらね、普通に何事もなく席に着いたよ。
楽勝だね、こんなもんだ、俺に抗う者無し！
そう決め込んで、余裕こいてたんだよ。
おっと、博が近付いてくるぜ。

「おっす、寝る雄」

「よう、博、今日はご機嫌いかが？」

「ふ、最高よ！昨日のお前の電話でふっきれたぜ」

俺なんか博に言ったっけ？微妙に記憶が曖昧なため、取り合えず流して
話しを続ける。しかし、その後、博から飛び出てきた言葉に俺は驚愕し
千鶴ちゃんへの警戒網が微妙に緩くなってしまう。

「俺今日、お前んちに行くよ」

「そうか、何して遊ぶ？」

「いや、お前と遊びためにに行くわけじゃねーよ」

「？」

俺は奴の言ってることが、普通に理解できなくて、更にその深い意味を汲み取ろうと
問いかけてみる。

「じゃ何しにくるの？」

「雪乃さんに告白しにいくんだよ」

「！？？？」

お前…、突然どうしたんだ、悪い物でも食ったのか？
正気かどうか確かめるために、博の額に手を当ててみる。
３６，７度（俺比）、普通じゃん・・至って健康そうな博。
頭が正常だとすると、何が彼にこの言葉を押し出させるのか…。

「なんでそうなるの？」

自信という言葉を顔に見えないペンで書いたかのような博に、素朴な質問を投げかけてみた。

「俺は今まで、雪乃さんにゲーオタへの偏見の有無の確認ができなくて」

「告白をすることを、止めていたんだ」

「だけど、お前の昨日の言葉で、その心配がなくなり」

「今日告白する事にしたんだよ」

博はすごい男だ、この時奴との格の差を感じたね。

この無鉄砲極まりない計画を口にする度胸に完敗だよ。
俺は千鶴ちゃんに告白するのに、どんだけ神経をすり減らし、多大な時間を使ってオブラートに包み込むように告白へと繋いでいったことか…。
そんな過程を一気に飛び越え、今日家にきて兄貴の前で妹に告白する気ですよ。

「お前、怖いとかないの？」

俺の口から突いて出た当たり前の質問に、博はさらっと笑顔を浮かべ返してきた。

「なるようになるさ！」

博…、すごいけど、その恋の成就の可能性は俺から見てもかなり低いぞ。
雪乃と俺達の通う高校は別なわけだよ。
それは簡単に言うと、触れ合う機会が全く無いという事だ。
俺を通して家に何度かやって来て、その短い時間に雪乃と触れ合ったつもりかもしれないが
雪乃からすれば、お前は唯の俺の友達であり、ゲーオタの印象しかないはずだよ。
そんなお前の告白を受けて、ＯＫだすような女だと思…
いや、もう辞めとこう。
これ以上言わないよ…。

「そうか、頑張れよ」

俺は静かに博を見つめ、一言言い放った。
奴は俺のように結論ありきで行動するような男ではない。

熱いハートを燃焼させ、その思いを雪乃にぶつけるだろう。
その結果打ち砕かれようとも、奴にとって本望であるに違いない。

そんな博に心を奪われ、周りへの警戒を怠っていたせいか、彼女の接近にまるで
気がついていなかった。
そう、千鶴ちゃんは俺の横に仁王立ちしていたんだ。
冷めた細い目をして、席に座る俺を見下ろしていた。
そんな彼女を見て空気の読める男博が、俺に顔を寄せてきて静かに呟く。

「よかったな、まだいけるかもよ？お前も頑張れ…」

そう一言言い残すと、颯爽と俺の視界からその姿を消していった。

…博、Ｃｏｍｅ　Ｂａｃｋ！

過去編　成行き。

「寝る雄…」

いきなり呼び捨てか、この後、繰り広げられる会話に危機感が募る。
恐ろしい。

「ちょっとこっち来て」

千鶴ちゃんに手を引張られ、人気が少ない廊下に連れてこられた。
俺と向かい合い、あの冷めた細い目で俺を見据える千鶴ちゃん。
しばらくして、彼女の小さな口が開く。

「この前は悪かったな」

「騙してすまなかった」

!?

どう反応したらいいんだろう？いやどう理解すべきだろ？
この彼女の人間らしい言葉は一体。

「まだ私に気はあるか？」

なんという歯に衣着せない物言い。
どう答えよう…。まだ怖い、まだまだ信頼に値しない。
だけど、彼女なりの謝罪と復縁の申し出と受け取って良いのだろうか？
あの冷めた細い目のままだけど、俺が愛した千鶴ちゃんとパーツは

同じなんだ。
どう答えよう。取り合えず様子見がてらに、偵察機を飛ばしてみよう。

「千鶴ちゃんは、俺の事どう思っているの？」

しまった、偵察機どころか、爆撃機で本丸に飛び込んでしまった。

「寝る雄は私の彼氏だ」

えぇ、直すぎるけど、彼女の本音か？
そう来るとは思わなかった。爆撃機が打ち落とされてしまったよ。
次の手が浮かばないよ。不意を突かれてしまった。
なんて言おう、本気で何いったらいいのやら。
後ろに逃げ場はない、もうこうなったら言ってしまうぞ。

「付き合う？」

「よしきた！」

「商談成立だね」

「じゃ、教室もどろ！」

え、え、え
彼女は一瞬『タイプ1』の可愛い笑顔を浮かべたかと思うと
トントン拍子に話を進め、晴れて俺達はカップルに…
俺に手を軽く振り、身を翻すと、教室へと足を弾ませながら戻っていく。
ちょっと早すぎるよ…何も言えなかった。

でも可愛いじゃないか。
俺のハートは揺さぶられたよ
失いかけていた恋心に、小さな火が灯り始めたかもしれない。
…だけど
これでいいのか？俺。
いやいいんじゃないの？たぶんいいはずだよ。
何がいいんだよ？そこはかとなくいいんだよ。そうだこれでいいんだ。
俺の中に複数の俺が現れ、会議を開いた結果
取り合えず、試しにＧｏ！という意見で治まりがついた。

俺はその後、授業を４時間きっちり受けたらしいのだが
記憶にまったく残っていなかった。ずっと呆けてたようだ。
頭が真白になると言うけれど、これほど長時間真白なのも珍しい。
取り合えず、今から俺達は帰っても良いらしい。
教壇に立つ担任が、「寄り道せずに帰れよ」の言葉で
それを告げている。
さてと、俺は誰と帰れば？
まともな思考が蘇ると、現実的な選択に迫られる事に気づく。
博と今日家に一緒に帰らないといけないはずだ。
なんといっても、アイツの晴れ舞台だ。いや、、どうなるかはしらないが。
重要な人生の通過点である事には違いない。
そして、俺は今日晴れて千鶴ちゃんと恋人同士になったわけだ。
カップルだよ。そんな初日に、一緒に帰らないわけには行かないはずだ。
どうしよう…？まじでどうしよう。どうするの？どっちも断れないよ。
一緒に帰る？それは無理だろ。じゃあ、どうするんだよ！
二人に分かれよう。俺１が千鶴ちゃんで、俺２が博で。

いやそんな分身の術を持ち合わせていないよ。あぁこまったぁ～～～！

！？そうだ、良いこと思いついたぞ。

時間をずらせばいいんだよ。博に事情を説明して、どこかで待ってもらおうか。

そうだな、ゲーセンで落ち合えばいいな。何でこんな簡単な事に気づかないんだよ。

本当に馬鹿だな。

「博～！」

「寝る雄どうした？早く来いよ」

「寝る雄君、三人で帰ろ！」

俺は本気でこけた、それが石で躓いたのか、意識的に地面にキスをしたくなったのか

定かではないが、前のめりに倒れこんだ。幸い地面が運動場だという事と

少し雨が降ってぬかるんでいたせいで、ダメージは少なくてすんだが・・・

俺はもう唖然として言葉という存在すら忘れたかのように

只管押し黙っていた。帰る途中、博と千鶴ちゃんの会話に耳を欹てる事しか

出来なかった。

「へ～、千鶴ちゃん、当等寝る雄の彼女か」

「おめでと～」

「えへへ、有難う」

明るく爽やかな顔で千鶴ちゃんと話す博。千鶴ちゃんはタイプ１の笑顔で微笑み返していた。
俺は俯いて、コンクリートの地面に描かれた規則正しく並ぶ四角形の模様に
ケンケンパーをするみたいに、境界線を踏まずに足を交互に踏み入れる。
時々、犬の糞が現れると、大股でそれを飛び越え一つ先の四角形に飛び移る。そんな俺をよそに二人の会話は続いていた。

「よっし、寝る雄が頑張ったんだ」

「次は俺の番だ」

「うまくいくと良いね」

「ありがと、まぁ、どうなるか知らないけど」

「やれる事をやるだけさ」

「俺の思いの全てを素直に語るよ」

夏の太陽の日差しが博の眼鏡のレンズを眩しく照らす。
お前輝いてるよ。
応援はするよ、だけど…責任は持たないけどな。
しかし、俺は何で三人で帰っているんだろう？
やっとその疑問が頭に浮かび始めた頃、千鶴ちゃんが家路が違う事を理由に
俺達にさよならを告げる。

「またね～！」

天使のような微笑を俺達に向け、制服を靡かせながら手を振るその姿。

眩しい。それは太陽の照りつけのせいでは無い。

紛うこと無き、彼女自身が発する輝きによるものだ。

やっぱり可愛いよ、千鶴ちゃんは可愛い。

今日は二人っきりになれなくて、彼女と本音で語り合うというよりは探りを入れながら、会話をすることができなかったけど、もう俺達はカップルなんだ。

恋人同士なんだ、そんな機会はこれからいくつもあるだろう。

急ぐ事はない、これから徐々に分かり合えばいいんだ。

表の顔も裏の顔も、どっちも千鶴ちゃんなんだし、両面受け入れて上げないとな。

多少時間は掛かるだろうけど、俺頑張るよ。

過去編　成行き。（後書き）

過去編長くてすみません、書きかた間違えました。

過去編　博動く！

俺は我が家へ帰ってきた、もちろん博も一緒だ。
玄関に入る前に、櫛で頭の両側面を後ろへ流す博。
気合入ってるな……。

「ただいま～」

俺が先陣を切って中へ入る。
返事がない、ただの屍……、いや違う、誰もいないようだ。

「博、いないわ」

「まだ学校か、寄り道でもしてそう」

博は一つ息を吐くと、少し小休止といった面持で
顔に笑顔を浮かべ俺に言った。

「まぁ、なんかして時間潰すか」

「お、おう」

取りあえず俺の部屋へ行くことにした。
さて、何をするかな？

「俺、こういうこともあるだろうと思って」

「格闘ゲーム持って来たよ」

「ハードとコントローラーも持ってきた」

俺んちには博のゲームが動くハードが無かったから
その点は準備のいい博。
あのカバンの盛り上がりはそれか。
顔にやる気を滲ませている。

「死ね〜！」

「滅せ、寝る雄」

博が俺の動かすキャラに、流れるようなコンボを当てた後
超必殺技で止めをさして、勝ち台詞を吐き捨てる。
相手になんねーよ。
あんまり一瞬で俺のキャラを亡き者にしたので
何度も奴にリベンジを試みるが……。

「ははは、よえーなおめー」

「無駄無駄無駄ー！」

とても勝てねぇよ。
歯が立たないとはこういう事をいうんだよ。
俺のキャラは最初のパンチ→キックで既に息絶えていたが
それに超必殺技が炸裂したもんだから…
死んでるのにめちゃめちゃ暴行を加えられていた。
可哀相な俺のキャラ。
その様子を見ながら悪魔のような笑みを浮かべる博。
自分の顔、鏡で見たほうがいいよ……。
とても、これから告白するような男の顔じゃないから……。

◆◇◇◆

夕日が西に傾きかける頃、雪乃は帰ってきた。

「ただいま～」

「お、帰ってきたぞ」

「そうか」

雪乃が帰ってきたのだから、当然ゲームの電源を切って告白する心の準備をするもんだと思っていた。
しかし、奴はゲームのコントローラーのボタンを連打していた。
なんだ……？
この余裕というか、落ち着き払った態度は……。
博の横顔をそんな疑念を抱きながら見つめていると、突然部屋のドアが開け広げられた。

「ただいまー」

「あれ、やっぱり安田さん、来てるんだ」

「こんちわー！」

博はまだコントローラーを握っていて、雪乃に一瞥をした後挨拶を投げかけた。
ものすごくナチュラルで、普段どおりの博だ。

「へへ、また勝っちまったぜ」
ゲームの最上級設定のキャラをいとも簡単に倒すと
体を雪乃に向き直り博が言った。
「雪乃さん、またやりますかい？」
いや、それも普段どおりすぎ。
博は良く雪乃に対戦を持ちかけていた。
「むむむ、今日は負けないよ！」
当然のごとく雪乃も博に毎回ボコボコにやられていた。
そして負けず嫌いな彼女は、俺と同じ、いやそれ以上に
博を倒す事に執念を燃やしていた。
「くやし～～～！　もういっちょー！」
「よしこい！」
おうおう、盛り上がってる盛り上がってる。
いや～、しかし……。
後ろから、仲よく並んで対戦してるこの二人の背中見てると
案外、お似合いな気もしないでもない。
「また～」
「もういっちょ」

「もういっちょ」

……。

……。

…。

どこまでやるんだよ、お前達……。

俺は少し後ろで欠伸をしながら、箪笥にもたれかかって寝かけていた。

「雪乃さん」

「はい？」

ん？俺がなんとなく二人に目をやった時

博の空気が変わってたんだ……。

「次の勝負でもし俺が勝ったら」

「聞いて欲しい話があるんだ」

「へ？」

「ん～、なんか良く分からないけど、勝てたらね！」

「御意」

博、当等腹を決めたか。

告白するつもりだな。
雪乃は全くその意味は分かってない様子だけど
なぜかさっきより気合が入っていた。
博が珍しく苦戦している。
白熱するバトル、お互いのコントローラーと体が
激しく揺れ動く。
雪乃のキャラが大ジャンプして蹴りを入れようとした時
博の眼鏡が光った。
すかさず、左に回りこみ、着地際を狙っていた。
小キック、小パンチ、大パンチ→超必殺技！！
出た……、博スペシャル！！

「あ、あぁ」

「やられた……」

「ぐやじぃ～～」

地面に手を何度も叩きつけて、悔しがる雪乃。

「ふふふ、さてと、聞いてもらいますか」

お、博当等言うつもりだな……。

「何でしょう？」

雪乃は博に顔を向けると、さばさばした表情で博の顔を見つめて言った。

「雪乃さん、俺さぁ、なんての」

「ゲーオタじゃん……」
黙って頷く雪乃。
「でさ、ゲーセン行く度、いつも思うんだよ」
「俺の隣に相棒が欲しいなって」
「その相棒って言うのは、女の子が理想なんだ……」
「それも俺が心底ほれ込んだ女性が良いんだ」
雪乃はまだぽーっとした様子でそれを聞いている。
何が言いたいのか分からないようだ。
うーん、微妙な言い回しだよな……。
「つまり、雪乃さん」
「君が隣にいてほしいんだ」
「え……？」
そんな突然……、無理じゃね？
仮に雪乃が俺でも呆けてしまうよ。
雪乃は当然呆けていて、しばらく押し黙っていた。
一時の沈黙が部屋に流れる。
やがて、雪乃が言葉を口にした。
「なんで私なんですか……？」

今度は博が一呼吸置いたが、すぐに続けた。
眼鏡の奥に光る眼がとても優しい瞳を浮かべている。
「ただ、俺が君に惚れた、それだけだよ」
博はその言葉を言い終えると、視線を下に向け黙っていた。
返事を待ち受けているといった様子だ。
雪乃の返答がどうであれ、奴には本望なんだろ。
短い言葉にありったけの気持ちを、詰めいれて言い放ったんだ……。
俺は雪乃の表情を観察していた。
多少困惑が見えるが、「キモイ～、なんて言って断ろう」的な表情は
浮かべていない気がした。兄の主観に過ぎないが……。
雪乃が口をもごもごしだした。
何か言うつもりだ。
「あ、あの～、一つ聞いていいですか？」
「なんなりと……」
同じ姿勢だが、顔だけ雪乃に真直ぐ向ける博。
「学校は離れていますが、毎日会えますか？」
博はその雪乃の質問に即答する。
「無論です。そこが例え、富士山の頂上でも」
「お迎えに上がります」

「あなたのためなら、どこへでも！」

雪乃はその言葉をかみ締めるように聞き終えると視線を一瞬コントローラーに下ろした後、すぐに博を真直ぐ見つめた。

「分かりました」

「取りあえず付き合ってみますか！」

「ぜひ！」

げ、本気？まじ？カップル誕生！？

過去編　寝る雄立つ！

博は帰った。
言わずもがな、帰り際の顔はもうアレなわけで、何て言えばいいかな。
高校野球の優勝チームの選手が甲子園で校歌歌うときの笑顔？違うな、マラソン選手がゴール前間際で心で「ハイヤー！」と呟きながらテープ切るときみたいな？あぁ、良い例えがでないな……とにかく笑顔だね。もう最強の笑顔。

――……

俺は今とても複雑な思いで、台所に座る雪乃の横顔を見つめている。
彼女もまた案外さっぱりとした表情を浮かべていた。
あの告白でなぜこいつがＯＫしたのか俺には理解できなかった。
取りあえず、インタビューだ。

「なぁ、雪乃」

「なに？　」

「お前博のどこが気に入ったの？　」

頬に右人差し指を当て、テーブルに顔を向けて物思いに耽るように俺の質問の答えを捻り出そうとしている。
なぜ、そんなに悩むんだよ……？

「特に浮かばない」

なんだそれ、理由なしに告白にＯＫ出したと言うのか？

「強いて言えば、あの口のまわる所？」

「後、私のためなら命投げ出してくれそうな暑苦しさ？」

暑苦しさ……。熱意か？

「まぁ、付き合って損はないと思った」

俺は我が妹ながら、その屈託ない率直な意見に女の逞しさを見た思いがした。

いや、みんなこうじゃないと思うけど……

千鶴ちゃんも俺をこんな風に見てたりするのかと連想してしまった。

……まぁ、もういいや。所詮は他人の恋路。知ったこっちゃない。

他人の事より明日の俺だよ。

千鶴ちゃんとはもう、恋人同士なんだし、明日からバラ色の高校生活初日が始まるんだ。

それに備えてもう寝る事にしよう。

◆◇◇◆

今日も暑いな、いつもの道、いつもの学校。しかしその道のりを歩く気分は昨日までとは違う。どんな胸ときめく様な展開が待ち受けているのだろう？

俺と同じコースを辿る生徒達の顔が、心なしか綺麗に見える。アナログＴＶからハイビジョンに変えた時みたいにクリアで輝いて見えるんだ。

「おう、寝る雄おはよー」

博が教室へ向う廊下で俺にご機嫌の挨拶を飛ばしてきた。

案の定、清清しい笑顔を浮かべて。

「よー昨日のヒーロー博君じゃないか」

肩をポンポンっと二回叩いて勇者博を讃えると、彼は照れ臭そうに笑った。

「博、今日は帰り、もちろん雪乃の学校行くんだろ？　」

「そのつもりさ」

あいつの学校、うちらから徒歩で1時間くらい離れた場所にあるのに、結構大変だよな。

「博、まぁ　妹は頼んだぞ」

「任せとけよ、兄貴！　」

く、何か複雑だよ、いやいいんだけどさ。

……俺達は教室にやってくると、各々の席に着くため分かれた。

さーってと、千鶴ちゃんはどこですか～？俺の彼女、俺の女、俺

の女神はどこかな～？

「後ろだよ……」

はぅわ！　ビックリした。いつの間に俺の後ろを……？

「おぉ、千鶴おはよ！　」

いきなり呼び捨てで行くぜ。

「寝る雄、遅いよ」

彼女は冷めた細い目をしていた。

昨日までの俺なら、この目の威圧感に押され、カエルに睨まれたミミズ（何か違うな）のように怯えていたんだけど……今日は違うぜ、俺の防御力は上がったよ、心につけた装備品が新しい物へと変わって以前とは耐久度が違うぜ。

「ごめんよー待ったかい？」

頭を平手打ちして、申し訳無さそうな顔を作ってみる。

「２３分３９秒待ったよ……」

その不意打ちのような言葉に冷たい汗がこめかみを通過した。

凍り付いたよ……怒ってるかな？

でもここで飲み込まれてはいけない。顔を引きつらせちゃいけない。

取り繕うんだ、ケッパレ寝る雄。

「そ、そんなに前から待ってたんだ……？」
「うん、寝る雄の来るのを首をなが～くしてね」
「ほんとごめんよ～」
「気にしなくても良いよ、好きで待ってたんだし」
まだ大丈夫、彼女は怒ってはいない。
会話的にはごく普通だ。早めに来て、彼女は待っていてくれたんだ。
優しいじゃないか、理想の彼女だよ。

……彼女は冷めた細い目で俺をみつめている、いや観察？
とにかく俺のほうをじっとみている。
何か言わないとな……
「あ……」
「そうそう、今日、暇あるかい？」
俺の言葉を押しつぶし、彼女が口を開いた。
「あるよ、いつも暇だよ」
「じゃあ、今日さ、寝る雄んち行っていい？　」
「良いけど……」

いきなり家来るのか、予想外だな。
掃除もしていないし、エロ本だってベッドの下に挟んだままだ。
目ざとい彼女なら、速攻見つけ出すに違いない。
しかしまぁ、普段から掃除してるしな。
ちょっと待ってもらって、すぐ片付ければ問題ないか。

「いや、良いに決まってるよ、おいで」

「ありがと～！　寝る雄君」

うわ、タイプ1の眩い笑顔……。
たまんねぇ、この落差はすごいよ。
萌えって言いたくなるような笑顔だ。

「じゃ、先生来るし、自分の席戻るね～」

「おう」

かわいい、あの顔でできれば固定してほしい。
しかし、意外となんとかなりそうだよ。
なんとなく彼女と付き合うコツみたいなのが分かってきたぞ。

過去編、彼女の秘密。

「帰るか～、博またなー！　」

「お、おう」

博は俺とまともな会話を交わす間も惜しんで、雪乃の学校へ行くため突っ走っていった。
徒歩で一時間なわけだし、走り続ければ３０分ってとこか。
まぁ……汗だくもいいとこだろうけど、頑張ってくれ。
俺は俺の戦場が待っている！

「千鶴ちゃん～どこ行ったのかな～？」

教室を見渡すが、彼女の姿が無かった。
どういうことだ……？

「今から寝る雄んち行くよ」

「俺も一緒に行っていいか？」

「うん、きなよ」

千鶴ちゃんが誰かと喋っている。
誰だよあれ？
短髪の黒髪、男らしい眉毛、太い腕、シャツの間から見えるギャランドゥ～
なぜそんなムキムキマンと一緒に会話しながら俺に近付いてくる

……
反則だろ……。
どういうつもりだ？
来やがった……
彼氏の前でいきなり浮気披露でもするつもりか？
「寝る雄、行くよ」
「ちょっとまったー！」
何を平然と事を進めようとしてるんだ。
その隣の男の説明がまだじゃないか。
ここは譲れないよ、ちゃんと聞かないとな。
「そのお方は誰？」
いや、もう、「お前誰だよ？」って直に噛み付き気味に聞きたかったけど
抑えたよ。
とても強そうだし、ケンカしたらまず地面に、這いつくばることになりそうだからね。
もちろん俺が……
「これ？　私の兄貴だよ」
「おっと……紹介がまだだったな」
「寝る雄君って言ったかな」
「俺がコイツの兄貴、源五郎だ」

「よろしくな」

「はい、よろしく」

無意識にお辞儀を3度連続で彼にしてしまった。
いや、せざるを得ない雰囲気を醸し出す男。
こんな奴が千鶴ちゃんの兄貴だと〜〜！？
まぁ……驚くほどでもないけど、彼女も十分ユニークだし……
こんな兄貴がいてもおかしくはないよ。
でも……問題は、さっき遠くから聞こえた会話だよ。

「千鶴ちゃん、もしかして……お兄さんもうちに連れてくるき？」

「うん、駄目？」

「いや……でも……」

素直にＯＫなんか言えるわけないじゃないか。
何故、兄貴を彼氏の家に連れて来るんだよ。

「寝る雄君、気にするな、ちょいと話があるだけだ」

「家の中にまでは、お邪魔する気は無いよ……」

鋭い目つきで俺に威圧感を目一杯浴びせかけてくる。
これは断れないよ、でも家の手前で帰るって行ってるんだし
取りあえず、折れておかないと怖いな。

「じゃ、じゃあ、行きますか……」

「うむ、行こう」

良く分からない展開のまま、なぜか千鶴ちゃんとその兄貴に挟まれながら家路を辿る。

「寝る雄、今日何して遊ぶ？」

千鶴ちゃんが、いつもの冷めた細い目で聞いてきた。

「そうだなぁ……」

彼女との会話中にも隣の兄貴の存在が気になる。
額に汗が吹き出てくるので、ポケットからハンカチを出してこまめにふき取る。

「寝る？　」

「え！？」

喉から心臓吐き出しそうになった……
唐突にとんでもない事を……
彼女の口からそんな大胆な言葉が、いきなり出てくるなんて。
寝るってあれの事か～～～？

「寝るだと～！！　」

兄貴の目つきが更に鋭くなり、声に明らかに殺気が混じっていた。
何で怒るんだ、何で俺みるんだ、俺が言ったんじゃないよ～～。

「俺の妹を……てめぇ許さねぇ……」

手を組んでバキボキ言わせながら、俺ににじり寄る源五郎。
おい、千鶴ちゃん、助けてよ～？
なんで黙ってみてるの……？
千鶴ちゃんに助けを求めて、藁をもすがる視線を送るが、彼女は余所見をしていた。
電柱に止まるカラスを見上げていたんだ……

「おらー！　」

兄貴が物凄い勢いでマッチョな体ごと突進してくる。
だ、だめだ……殴られる……。
目を瞑りその時を待つ。

――ん？　兄貴のワイルドなパンチがこねぇ……

目を恐る恐る開けてみると、俺の顔を覗き込みながら源五郎は笑っていた。
なぜか一緒にいる千鶴ちゃんまで俺をせせら笑っている。

「ははは、ごめんよ～、寝る雄ちゃん」

「兄貴、今の良かったよ、迫真の演技だよ、二重丸」

「そう～？　まぁ千鶴には負けるけどね～」

どういうことだ……今分析中……
兄貴の雰囲気が豹変した。さっきのドスの効いたコワモテマッチョマンから

オカマバーのマスターに変わったよ。

「あの、どういう事？　」

俺は思わず思った事を直言ってしまった。

無理もない、二人のパラレルワールドに突然引き込まれたんだから。

「寝る雄ちゃん、知らないの？　千鶴」

「あぁ、そういや教えてなかったね」

「じゃ、私が教えてあげようかしらん」

マッチョオカマと化した源五郎が、俺に気持ち悪い視線を向けて何かを話すつもりらしい。

「水城紗枝子って知ってる？」

「確か、その人有名な女優さんでしたっけ」

「そう、あれ、うちのママンなの」

「ええ！？　」

驚いた……

水城紗枝子っていや～、サスペンスドラマや恋愛ドラマ、時代劇、ｅｔｃ――でひっぱりだこの有名な女優さんじゃないか……

そんな有名人が千鶴ちゃんの母上だと～～～！？

「でね～、うちのママン演技とかうまいでしょ～」
そら女優だしね……
「言わば、演技のプロよね」
「そんな母を持つと私たちも大変なのよ～」
「私たちにも俳優や女優の道を目指す事を強要してきてね～」
「それになるためには、日ごろの鍛錬が必要とか」
「だから、毎回、私たちにお題をだしてくるの～」

ゲンゴロウは体をクネクネさせながら、内股で気持ち悪い目線を俺に向けて連射してくる。
巧みに俺はそれを交わし続ける。
左、右だ、そこで左向け、やばい正面からくるぞ、そこで足を掻きながらしゃがんで回避！
――取りあえず
彼の目線を交わし続けるのも大変なので、千鶴ちゃんに視線を合わせたまま、彼にお題の事を聞いてみよう。
「どんなことさせられるんですか？　」
視線を向けた先が千鶴ちゃんだったせいか、それに答えるのも千鶴ちゃんに変わってしまった。
「簡単だよ、決まったキャラになり切る事」

「今兄貴に出されてるのは、硬派で喧嘩っ早いマッチョマン」

「そして、あたしに出されてるのは……」

ごくり……固唾を呑んで耳を傍立てる。

彼女は一体何に……？

「男を手玉にとる無垢な美少女……」

ちょ、ちょっと待てよ、　まさか……俺をやっぱり騙してるのか！？

頭の中にふつふつと怒りがこみ上げてくる……

「あ、でも勘違いするなよ、寝る雄」

「私は男にはうるさいから、演技のために適当な男に声掛けるなんてしないから」

「寝る雄は私が気に入ったから声掛けたんだよ、演技はついでだよ」

ナイスフォロ〜〜〜！　千鶴ちゃん！！

この時、彼女の誠意を始めてみたかもしれない。

やっぱり彼女は悪女なんかじゃなかった……

なんだかんだいって、俺の事を思ってくれている。

千鶴ちゃんは俺にホの字。そして俺も……

ラブラブ路線は変わらないぜ。

過去編　前兆。

嵐は去った。
千鶴ちゃんの兄貴は突然腹を押さえながら苦しみ出したかと思うと
「腹いてぇ！！　便所ーーーー！！」とか叫びながら、内股でどこかへ駆けて行ったっきり、帰ってこない。
何か悪いもんでも食ったんだろうか。
俺んちまではまだ距離あったし、近くのコンビニを探しに行ったようだ。
取りあえず、戻ってこないので、俺達は二人で我が家へと向った。

「千鶴ちゃん～！」

「どうした寝る雄」

「手握っていい？」

ゴリラは去った……その解放感に身を浸しているうちに、気がだんだん大きくなってくる。
恋人になってから、それらしい事をまるでやっていなかった俺達。
そろそろ奥行きのあるスキンシップをしてみたく思い、彼女に切り出してみた。

「いいよ」

彼女は冷めた細い目は相変わらずだけど、素直に右手を出して俺の左手を受け入れる用意をしてくれた。
ほっそりとしてきめ細かい肌質の可愛い彼女の右手。
俺に差し出されたその手をそっと左手で握る。

そうすると、彼女は柔らかく握り返してくれるかと思っていたんだけど……

――ギシ、ミシミシ……

とても嫌な音がしたんだ、俺の左手から。

い……痛い、ちょ、砕けるって……どういう握力をしてるんだ！

「ただいま～」

ゲ、源五郎！　彼は俺と千鶴ちゃんの隙間から右手を割り込ませていた。

彼女の手だと思っていたものは源五郎の手だったわけだ。

俺の左手は再起不能寸前まで追い込まれていたが、彼なりの力の加減の尺度があって、砕ける前には離してくれた。

「あ、ごめんね～寝る雄ちゃん、置いていかれたもんで、つい力入っちゃって～」

彼はたぶん、大便をしてさっぱりしたんだろう。

オカマ臭い顔にもそれなりに、清涼感があふれていた。

けれど、多少怒っているのかもしれない。

言葉の一部分に、どでかいトゲが一つ垣間見える。

「千鶴～、何で待ってくれないの～」

「ん？　邪魔だから……」

千鶴ちゃんが俺が言いたくても言えないことを、直に彼に伝える。

俺は思わず息を呑んで、その場に立ち尽くして動向を見守る。

「邪魔って私のこと言ってるの？」

「そうだよ、とっても邪魔だよ、そろそろ帰りな」

そう吐き捨てると、千鶴ちゃんは俺の左手を引っつかんで
歩くテンポを早めた。
なんて……逞しい。
彼女の細い手に引張られるがままの俺。
あぁ、いい、とってもいいよ～。
手を握るじゃないけど、握られて二人して歩いてるよ、幸せ～～！
一時の悦に浸り、夢見心地な俺は現状を把握しているようでして
いなかった。

「こら、待てや～～！」

は！　お兄さんを忘れていた……
源五郎は演技なのか、素なのか分からないけど、顔を紅潮させて
ドスの効いた声を、千鶴ちゃん？　もしくは二人？　に向って掛け
てきた。

「妹のくせに兄にそんな口聞いて、ただで済むと思ってるんか？」

「しるか！　つべこべ言わずかかって来な」

ええ、そんな、思いっきり煽ってますがな……兄妹バトル突入！？

「いい度胸してるじゃねーか！」

「いくぜ、千鶴～～！」

そう源五郎が言い放つが先か、小柄な彼女に向ってマッチョな体が向っていく。
太く毛深い右腕を後方へと引くと、彼女の顔目掛けて、大きな拳がーーー！
――――そんなこと、させるもんか～～○×”＃％’＆％！
……この時、俺の中で何かが弾けたんだ……
彼女の顔に拳が届く寸前に、俺は源五郎の右腕を横から掴んでいた。
「おい、てめぇ、いい加減にしろよ」
「あれ、寝る雄ちゃん……本気にしないでよ」
俺は源五郎を強く睨みつけながら、普段から考えられないような強気な発言を飛ばしていた。
「つべこべ言ってんじゃねー！　死ねや～！」
俺？　が放ったアッパーカットが、源五郎の顎を下から鋭く突き上げる。
その凄まじい威力に源五郎は大きな体ごと空に舞い、弧を描いて地面に背中から叩きつけられた。
「アニキ～！」
「大丈夫～？」

千鶴ちゃんがアニキの壮絶なやられっぷりに、思わず安否を気遣って駆け寄った。

「すごいわ、寝る雄ちゃん、惚れ惚れとするアッパーカット……」

そういい残すと、源五郎は気絶した。

「ふーふー、あ……」

我に返るという表現が、当てはまるかどうかは分からない。
だけど、普段の俺に戻っているのだけは実感できた。
源五郎を殴ったこの拳に、言いようの無い罪悪感を感じていたからだ。
自分のやった全ての事は、一部始終記憶には残っていた。
倒れた源五郎とそれに寄り添う千鶴ちゃんの元へ、急いで駆け寄る。

「ご、ごめんよ」

「こんなことするつもりじゃ……」

俺は千鶴ちゃんに手を合わせて謝る。
その俺に振り向かず、兄の様子を窺う千鶴ちゃん。
どうしていいか分からず、おどおどした視線を二人に巡らしていると、千鶴ちゃんが静かな口調で俺に言った。

「寝る雄、今日は帰るよ、アニキ手当てしないといけないし」

千鶴ちゃんは俺に冷めた細い目を向けると、カバンから水の入っ

たペットボトルを取り出し
彼の顔に上から注いだ。
「ぶは、うーん……」
「ほら、帰るよ、アニキ」
「うん、あ」
源五郎は水を浴びて意識を取り戻すと、顔をぶるぶる震わせ半身を起こした。
しばらく呆けていたが、千鶴ちゃんに声を掛けられ、意識がクリアになったのか、すぐに立ち上がった。
そして、千鶴ちゃんの後ろにいる俺を見つけると、優しい口調で俺に話しかけてくる。
「寝る雄ちゃん、気持ちいいアッパーだったよ～、中々やるね～」
「この事は気にしないでいいからね～、じゃまたねー」
俺にさっぱりした顔でそう言うと、妹と二人並んで帰っていった。
その場に取り残される俺。
いや、これって……すごいまずくない？
アニキはともかく、千鶴ちゃんが……いや兄貴にも悪いし。
てか、俺なんであんな事を？
頭の中が混沌とした状態に陥り、しばらくその場で俺は物思いに耽っていった。

過去編、杞憂？

俺は一体……

何が起こったって言うんだよ。

どうしていいか分からず、しばしその場で茫然自失で佇んでいたものの、取りあえず、家に帰る事にした。

誰もいない家に一人入っていくと、顔も洗わずに2階にある自室に引きこもる。

カバンを無造作にそのへんの地面に転がし、即ベッドに背中から倒れこみ、仰向けに両手で目を押さえながら横になった。

ベッドは非常に気持ちよく、油断しようものなら、すぐにでも意識をまどろみの中へ引きずり込もうとする。

妙に今日は睡魔がひつこかった。

あーもう、まだ日も明るいってのに寝るかよ……

俺は今日起きたことを、横になりながら一つずつ思い浮かべる。

千鶴ちゃんは女優の娘で、オカマでマッチョのアニキがいて、そのアニキを見事のアッパーでノックアウトした俺。

そしてそれが理由で千鶴ちゃんを、我が家へ向かいいれる事はパーとなり、今こうして寝ているわけか。

千鶴ちゃん怒ってるかな？　源五郎は元気かな――愚問か。

いや、そんなことより、特筆すべき事は源五郎を殴った時の俺の状態だよ。

俺はあんなマッチョマンに、ケンカを売る度胸も腕力も持ち合わせた人間じゃない。

なのにあの時――突然俺の中で何かが弾けたような感覚にとらわれた後、良く分からない制御不能な感情が雪崩れ込んできて、俺の口から、らしくない強気で粗暴な言葉が吐き出てきたかと思うと、

あのアニキをこれまたらしくない、超絶アッパーでしとめた。
あの一連の俺の身に起きた出来事は何なんだ？
右に転がり、左に転がりそれについて考えるものの、答えは一向に出てこない。

#

日が西に傾き空が茜色の染まる頃、窓の外から聞きなれた声が俺の耳に届く。

「雪乃さん、今日は楽しかった」

「うん、私も」

アイツ等か……
そうだ、博だ。
奴なら何か分かるかもしれない。
分からなくても、何か言ってくれるはずだ。

「じゃまたね～」

「おーーーい、博！！」

俺は博が危うく帰りそうになったのを、窓を開けて大声を放って呼び止めた。
窓からいくらか会話を交わし、「俺の部屋で少しばかり話をしないか？」と博に言ったら、あいつは相変わらず空気を読める男なわけだ。

俺のどこか迷いと不安で曇った顔を見るなり、眼鏡を布で擦りながら爽やかな顔で「いいよ、俺でよければ」と返してくれた。

#

「汚い部屋だけど、入ってくれ」

「はは、いつものことじゃねーか」

博は雪乃の学校までのマラソン、その後の雪乃との交流、そして、雪乃を我が家まで見送り、疲れてないわけがないはずなのに、いつもどおり嫌な顔一つ見せず、俺と接してくれる。

「どうしたよ？」

博が唐突に聞いてきた。

「……」

俺は言葉が喉から出てこない。聞いてもらいたいはずなのに、何から話せばいいのか、考えていなかった。

「これ飲めよ」

博はどこかの自動販売機で買っただろうウーロン茶を、バッグから取り出し俺に手渡す。

炎天下の中長時間バッグの中にあっただろうそれは、既に中は生温かったが、なぜか乾いた心と喉を微妙に潤し、俺に冷静な思考能

力を呼び起こさせる。
そうだ、とりあえず、最初から順を追って話そう。
「博聞いてくれ！」
「おうよ」
博に拙く短い言葉を途切れ途切れに発しながらも、今日起きたことを理解できるように要点を伝えていく。
そして俺の身に起きた出来事も大まかにだが、イメージを博に渡す事はできたはずだ。
全部話を聞き終わり、夕日が反射する眼鏡を、時折上に持ち上げながら博は黙っていた。
今、博の頭のスーパーコンピューターが凄まじい勢いで、俺の話した内容を理解し、噛み砕き、そして自分なりの見解を組み立てているに違いない。
#
博が動いた。
いつになく真剣な表情を向けて、何かを告げようと俺の顔を覗き込む。
「寝る雄、大体話は分かった」
「途中、俺も驚いた部分はあった、千鶴ちゃんの母上の事、アニキの事。だが問題はそこじゃないし、お前もそんな事はどうでもいいはずだ」

その通り、良く分かってらっしゃる。
「お前の変貌に対する俺の見解を話そう」
博はいきなり核心に触れてきた。
よけいな言葉を完全に省き、俺の求める答えに繋ぐ要領を得た会話の流れ。
さすがだ。
「簡単に言うとだな――」
俺は息を呑んで博の会話の先へと、神経を張り巡らせて聞き入る。
「悩むほどのことじゃないんじゃないか？」
思わぬ言葉に、感情が揺れ動く。
何か言おうと、口を開きかけた俺の顔に、右手のひらをだして制した。
「愛する彼女が、兄貴にであろうと、目の前で大の男に固く握った拳で殴られようとした」
「それを目の前にして、お前が無意識にだが、彼女を守ろうと兄貴に立ち向かい、そしてぶちのめした」
「ごく普通の事じゃないか？　人間として、男として、彼氏としてお前はお前の責務を果たしたに過ぎない」
「兄貴が演技で殴りかかったにせよ、それを判別する術を持ち合わ

せていないお前が、そういう行動に出たのは仕方ないし、非があるとすれば、そういう勘違いを生ませるような行動にでた兄貴のほうだと思う」

博は真剣な言葉を連ねると、最後に口元を綻ばせながら俺の肩に右手を置いた。

「俺はお前に逆にこう言いたい、よくやった！って」

「そして、そんなお前と友である事を誇りに思うぞ」

「悩む事は無い、胸を張れ！　お前のしたことは至極当然だし、何もおかしい事ではない、自然にでたものだ」

「なーに、それは千鶴ちゃんも分かってくれるはずだ」

俺に渋い顔で逞しい言葉を掛けてくれる博は、まるで３０年来の友達か、お師匠様のような存在に思えた。

なんて良いことを言う奴なんだ……

つくづくそう思う。

ゲーオタだけど、人間として博は素晴らしい考えの持ち主であり、俺の唯一無二の親友だ。

この男なら雪乃を任せても、間違いないだろう――いやそんな事今はいいんだけど。

――だけど……何か引っかかる。

何かが。

過去編、覚醒。

次の朝、学校が普段通りあるわけで、太陽の日差しを瞼に受けた俺は、一つ欠伸をすると、布団を跳ね除け、学校へ行く準備に取り掛かる。

母ちゃんと雪乃が慌しく飯を食い散らかし、母ちゃんは俺にフライパンにある玉子焼きの存在を示唆すると、さっさと会社へ出かけていく。

父さんの姿は既に無い。片道1時間の会社へ着くには、俺達と同じ時間に起きていては間に合わないんだろう。

影の薄い父上。そのうち存在感が増す日も来るだろう。

取りあえず、雪乃に博との今日の予定を尋ねてみる。

「今日はダーリンとなんか予定あるの？」

ご飯を先ほどの玉子焼きを味わいながら腹にかきこむ。

俺がひやかすように放った言葉に、雪乃は面倒くさそうに訝しげな目を向けて返してくる。

「んなの、お兄ちゃんに関係ないでしょ」

「へいへい」

そう言いながらも、多少俺は兄貴として、突っぱねられた事に寂しさを感じてしまう。

あぁ、我が妹はこうして大人になっていくんだなって。

小さな頃は事あるごとに、「お兄ちゃん！」を連呼してなつかれたもんだが……

#

俺は面倒くさい学校への道のりの全行程を終え、教室の扉の前まで来ていた。
相変わらず中から、ピーチクパーチク賑やかな男女の声が漏れ聞こえてくる。
俺が扉でもたもたしていると、突然後ろから強い口調で話しかけてくるものがいた。

「寝る雄、さっさと入れよ」

「ん？」

そう偉そうな声を浴びせてきた男の名は神楽昌彦。
金髪で眉毛が薄い、いかつい顔をした男。
このクラスの中じゃちょっとした強面で名が通っている、言わば、ぐれてる奴？、ＤＱＮ？
馬鹿？　不良？　何か古いな、まぁそういうややこしい奴だ。
できれば、近寄りたくない奴であるのは間違いない。

「あ、どうぞ」

俺は神楽に道を開け、先に入ってもらうよう促した。

「ふん」

なんでそんな朝から不機嫌なんだよって思うような顔を俺に向けると、中へスタスタはいっていく。
そいつがいなくなると、一息ついて扉に手を当てる。
さぁ、俺も中へ入ろう――っとした時、体を先に割りこませ入ろうとしてきた不貞の輩がいた。
もう、神楽のような不穏分子はこのクラスにはいないと思い、ちょいとムカついたので、その輩にきつい言葉を浴びせてみる。

「ちょ、俺が入ろうとしてるのに……」

きついといっても、この程度しか言えない俺。

「うっせーんだよ」

そいつは長い髪を右耳から後方へ流しながら、俺に鋭い犯罪者のような目を向ける。
女だ。しかも怖い女。あぁ、忘れてたよ。
神楽の女バージョン、志賀真由美だ。
長髪を茶色に染めていて、ボインで美形の女、どこか擦れた目を浮かべる影のある女。
彼女もまた、朝に似合わない虫の居所が悪そうな顔を浮かべて

「さっさとどけよ」

怖い顔で凄んだかと思うと、俺の左足に振り向かずして、右足で蹴りを命中させる。
痛いと思いつつも、視線を向けずに俺の足に正確に当てた事に、ブラボーっと言いたくなったがそこは抑える。
しかし、男がやったらムカつくんだろうけど、女がやると格好よく見えるのはなぜだろうか。

#

朝からそんなハプニングを2度味わい、多少おどおどしながら教室の中へ向うと、博と千鶴ちゃんが俺の席でなにやら会話を弾ませていた。
そこへ割ってはいる俺。

「おはよー」

「おう、寝る雄、おはよ」

「おはようさん」

それぞれと挨拶を交わした。
博は普段通りの笑顔を向けて俺に爽やかな挨拶を飛ばす。
千鶴ちゃんはまぁ――冷めた細い目がデフォなんでなんとも言えないが、爽やかとは程遠いかな……
昨日の事もあるので、少し様子を窺いながら、会話へ入るタイミングを計る。
俺が何か言おうとした瞬間、千鶴ちゃんが俺にあの目を向けてきた。

「寝る雄、昨日の事はきにしないでいいからな」

「あ、ごめんよ、昨日」

「うん、いいよ、兄貴が悪いんだし」

なんて素直なんだ。
しかも、いきなり先手で言われてしまった。
これは――もしや、博が空気を暖めてくれていたのかと思い、博に視線を向けると、案の定、片目を細めて俺に何かの意図を伝えてきた。
やはり、さすが博。ありがたや～。

#

俺は千鶴ちゃんの言葉で安堵してしまうと、トイレに無償に行きたくなった。
朝きっちりしてきたんだけど、今日はボリューム多めらしい。
便意が波濤のごとく急激に押し寄せてきたので、二人にトイレへ行くことを告げると、内股になりながらトイレへ走る。

便所ー、便所ー！
心の中で便所のイメージがぐるぐる回り始め、それしかもう頭になかった。
それが少しばかりの不注意につながり、敵との接触を回避する足を遅らせる。

「コルァ、テメーいてーじゃねーか！」

げ、神楽……
このやばい時にやばい奴に体当たりをしてしまったよ。
殺されちゃう。
もう、俺の腹の痛みは限界だというのに。
どうしよう、平謝りするか？
俺は便意に頭を混乱させながらも、恐怖におののく。

「てめぇ、謝らないつもりか？」

「ごめんなさい、すみません、でも腹が」

謝りながらも便意の旨を彼に伝えた。

背に腹は変えられないんだ。

「そんなもんしるか、土下座しろ」

そんな、この便意で土下座なんかしたら出ちゃうだろ。

「早くしろ！」

ああ、もう駄目だ、そう俺の中で苦悶が頂点に達した時

――あの瞬間が訪れたんだ。

俺は意識が虚ろになり始めると、急激な睡魔に襲われ、額に右手を当てて、その場で暗く俯いて佇む。そしてしばらくそのポーズで沈黙を決め込む。

「あん、なんか言えよ？」

「……」

「こら、さっきのは誰に向って言ったんだ？」

「おめーだよ……」

そして次の瞬間、一転して態度を変えると、俯いていた顔を神楽に向けて強気の発言を飛ばした。
俺の中に良く分からない感情が流れ込み、全く制御ができないんだが、元の意識はきっちり残っていて、今発している言葉に心の片隅にいる本当の俺？　は恐怖を感じていた。
――がそれとは別にその異質の感情が俺の言動をきっちり支配していた。

「てめぇ、誰に口聞いてるつもりなんだ？」

神楽は凶悪な顔を更に歪ませ、見るに耐えない顔で凄んでくる。
今にも掴みかかってきそうな勢いだ。

「同じ事言わせるな、おめーにってんだよ、死にたいのか？」

俺がそう神楽に凄み返すと、なぜかボクサーのオーソドックススタイルで左手を前にだし、右手を後ろに引き気味に構え、左足を前にシフトし右足を後方にして浮かす。
そして、神楽を睨みつけた。
うん、たぶん怖い顔をしているよ、かつてないほど、顔の筋肉に力が入ってるから。

過去編、タイプ2の実力。

「最初に言っておく、一撃だ」

俺はその場で軽く脚を弾ませながら、神楽に言った。

「一撃だと？　一撃で俺を倒すっていうのか？　お前が？」

「ま、そういう事だな」

神楽にしたり顔で言ったに違いない。セリフから判断。

俺の顔は見えないしな。

ただ神楽の顔だけは俺からも見えた。

うーん、この形相は……、怒ってますね、凄く怒っています。

犬みたいに低い声で唸っています、鋭い目つきにこめかみに何本も皺が浮き出て、殺気が吹き上がっています。

やばいっす、どうしましょ？

いやもう、俺タイプ2に任せるしかないんだけど……

「しねやぁあ！」

突然、神楽は右拳を後方に素早く引き、勢いをつけて俺の鼻面に、その堅い拳を直ぐに突っ込ませてきた。

神楽渾身の右ストレート。

それが俺の目の前まで来た時、深層意識に押し込まれた俺は瞑目した。

いや、タイプ2の俺は目開けてますけどね……

真の俺はまだ目は閉じてるんだけど――――左手を素早く動かし

何かを払った感覚、右拳が堅い顔面を打ち抜いたような衝撃、嗚咽、呻き声、壁に叩きつけられた何かの音、そしてタイプ2の俺の罵声と楽しそうな笑い声、しつこく誰か（たぶん神楽）へ右足を連続で振り下ろす行為、それに伴う呻き声――――

あぁ、そろそろ説明面倒臭いんで、目を開けます。

「ごめんなさい、もうしません、許して、許して」

「あぁ、てめぇ、これに懲りて偉そうな口俺に聞くんじゃねぇぞ！」

「分かりました、もう、あなたには逆らいません、忠誠を誓います、私は奴隷です、犬です、イナゴです」

神楽の顔面には俺の右拳の後がくっきり付いていた。

赤くはれた右頬、鼻からは鼻血が垂れていて、俺の右拳を顔面で受けた時、その衝撃で後ろの壁に叩きつけられて、そのままずるずる地面に座り込んだようだ。

その神楽に罵声と悪魔のような笑い声を発しながら、腹を足で何度も振り上げている。　もう完全にグロッキーな神楽は、ただバッタのように震える声で涙を流し謝っていた。

「まぁ、もう飽きたし、行けよ」

「俺もそろそろ便所行かないとやべぇ……」

腹を蹴る足を止めると、ふーっと大きなため息を付き、神楽に呟いた。

タイプ2の俺はちゃんと、便意の事を覚えていてくれた。

いや思い出させるほどの、猛烈な便意。

これだけは目を閉じても、真の俺にさえ苦しみが共有されていた。
もうこうなると、タイプ2も俺も行動が変わらない。
内股になって左腹を左手で押さえ込んでいる。
漏れそうなんだよ。
神楽はそのまま放っておいて、便所に走る！

「どけどけ～！！」

勇ましい声を上げながら、廊下の淀んだ空気を肩できりつつ走り抜けていく。
前に立ち塞がる、ふらふら歩く生徒どもをヒラリと交わすが、少し危うい。
あ、避け損なってしまった……
俺の猪突猛進なタックルを受け、横に吹き飛ばされる見知らぬ誰か。
ごめんよ、俺のようで俺なんだ。でもどうしようもないんだよ……

「便所発見～！」

恥ずかしい事を大きな声で。
もう少し慎みが欲しいよ。
大便用便所のドアをぶっきらぼうに開くと～～～～省略。

「すっきりんこ」

これを言ったのも、まだタイプ2の俺。
言動は違うようでやっぱり俺なんだなって、痛感するような台詞。
まだ支配は解けていない。
しかし、この長く押し込めていた物を外へ全て押し出した後の快感は、何と例えたら良いだろうか？

良くパニック映画で船が沈んだ乗客が、あらゆる苦難やハプニング、仲間の死を乗り越えながらも、沈み逝く船の外に脱出し、息が切れそうになりながらも海の表面にたどり着き、顔を出して新鮮な空気を吸って、安堵の表情を浮かべ、生き残った仲間と笑顔で顔を見合わせて、青い空を仰いだ時、ヘルプに来てくれたヘリの姿をタイミング良く、視界に捉えた時のようというか――――長いけどそんなかんじでした。

そんな快感の説明はさておき、これからだよ。
前の時、そう、この症状が出たのは、千鶴ちゃんの兄貴と一緒にいた時だ。
あの時は――殴った後、案外すぐにタイプ2の俺は消えたんだよ。
だけど、今は消えていない。
この後何しでかすんだろう？
真の俺は不安に苛まれながらも、何もできないので、彼の動向を見守るしかない。

「さてと、どうするかな」

どうするおつもりで？

「取りあえず、俺の彼女、千鶴に会いに行くか」

「寂しがってるかもしれないしな」

いやあ、それだけは止めて、お願い止めて。
そんな訴えは彼には聞こえない。
トイレを済ませた彼は、案外穏やかに廊下を歩く。
肩を張りながらだけど、相手がぶつかりさえしなければ、通りすがりの人に牙を向く事は無さそうだ。

どこか気取った歩き方、マイケルのムーンウォークでも始めそうな勢い。
顎をきゅっと引き、下から押し上げるような上目遣い。ちょっと目が痛いよ……無理してるってば。
結構、ハードボイルドが好みのようだ。
――あ、眼鏡の白いヒョロイ奴と肩が触れた。

……どうでる？

「気をつけな！」

「は、はい」

多少睨んだとは思うが、案外さっぱりした声を掛け、何事も起こさなかった。
うーん、案外紳士的な奴だ。なんでもかんでもケンカ売るわけじゃないらしい。

当等、教室の扉の前まで来たよ。
扉を開け放った瞬間――走った！物凄いダッシュ！
教室をうろちょろする生徒どもを巧みに交わす。
交わす！　交わす！　なんというフットワーク。
さっき便所に向かう時、避けそこなったのは便意のせいか！？
目指すは――あぁ、やっぱり千鶴ちゃん……
冷めた細い眼で椅子に腰掛け、何やら黒い怪しげな本に目を通していた。
そんな彼女の机の上側の角二つに両手を広げて突っ伏し、前のめりに千鶴ちゃんを覗き込んだ。
千鶴ちゃんの机が前に大きく揺れる。木の机の片隅に良く分からない魔方陣の彫り発見。

彼女は細い眼を俺に向けて、本を静かに閉じた。

「千鶴！　ただいま」

「寝る雄、遅かったな、大か？」

糞～、俺の彼女だぞ、気安くしゃべりやがって。
なんだか、タイプ２の俺に憤る真の俺。
千鶴ちゃんは、ごく自然に接している。
そいつは俺であって、俺じゃねーんだよぉお。

「まぁな、ところで千鶴、次の休憩時間、屋上で飯食おうぜ」

「ん？　何で屋上？」

「そんなもん決まってらぁ、俺たちゃ、カップルだぜ、二人っきりになる場所で飯食いたいだろ？」

「な？　いいだろ？　な？　な？」

「分かった」

周りに聞こえるような大きな声で、手のひらを前で合わせてまで頼み込む。
千鶴ちゃんは、特に驚いた様子も見せずに、タイプ２の俺に冷めた目で頭を縦に振り頷いた。
うーん、千鶴ちゃん俺の異変に気づかないのかな？
しかし、こいつ、大きな声で快活に言いたいこと言うし、強いし、何かかっこいいな。
確かに俺なはずなんだけど、なぜか嫉妬してしまう。

#

まだ支配が解けていないが、現在４限目の授業中――英語。

机に上半身を前のめりに伏して、左腕を横に長く敷き、その上に額を乗せる。

眠っているのを先生に悟らせないようにするため、本を頭の前に立てて、鉛筆を右手に持たせ、絶妙の角度でそれを固定させる。

鉛筆の下にはノートとその隣に開いた英語の教科書。

鉄壁の陣の中で眠りにつく俺、いやタイプ２。

普段の俺は案外真面目に授業きいて――――ないけど……、ここまで完璧な陣を張る事はあまりない。

よっぽど眠さに耐えられないという、不遇な事態に陥っている時くらいしか使わない。

だが、その鉄壁の陣を破ろうとする者がいた。

「ちょっとそこ～、寝てちゃ駄目よ～」

「起きなさい、えーっと、寝る雄君か」

優しいどこか色気さえ漂わす大人の女性の声。

この英語の授業を取り仕切る赤城香。

地毛か染めているのか、微妙な茶色がかった髪が肩まで伸びていたはず。

赤渕の眼鏡に大きな瞳、今日は赤渕メガネかどうかは知らない。

この学校にいる女教師の中じゃ美形な方だとは思う。

タイプ2の俺は寝ているが、真の俺は起きていた。
しかし、先生の声に反応しようと、体を動かそうとするが、まだ支配権は奴にあるようだ。
おいおい、赤城は美形だけど、怒らすと怖いぞ。

「起きなさい！」

ほら、声のトーンがさっきより2つほど、上がってきてますよ。
そろそろ起きないと、何か飛んでくるに違いな――ドカ！

黒板消しが俺の頭に命中……この感触は絶対そう。

白い粉がパラパラと腕に埋める顔の方へ降り注ぐ。
粉くさいよ、思わず咳き込む俺の体。これは自然反応だな。

「うーん、うっせーな」

うぇ、いきなり、そんな大胆な言葉を……

過去編　眠りの序曲。

「こら、寝る雄君、今の口の聞き方は何なんですか？」

さぁ、タイプ２の俺、どう弁解するんだ？

お手並み拝見。

「……」

あれ？　どうしたんだ？

「返事しなさい！」

スコン！

赤木の本を丸く折りたたんだ強烈な一撃。

痛ぇ、ふざけるな！　お前が何も言わないせいで殴られたじゃないか。

糞～、黙ってないで、ここで何か気の利いたこと言えよん？　起きてるんだろ？

あれ？　手動かせる？　あれあれ？　鼻の穴に指突っ込めるよ。

まさか、体の支配が解けてるんじゃ？

実験的に体を起こしてみる。普通に起こせた。

右斜め上方に、ちょっとキレ気味の赤城の殺気だった気配を感じる。

恐る恐る、赤城の怖い顔を下から覗き込んでみる。

今日も赤渕のメガネでしたか、良くお似合いで――じゃなくって！

「ごめんなさい、すみません、寝ぼけてました！　以後気をつけま

す！」

矢継ぎ早に沈静効果を与える言葉を並べ立てる。

こんな修羅場では、もう一にもニにも平謝り。生きていくコツだね。

ってそんな余裕ねぇよ。

「もっと気合いれなさいよ」

「すみません！」

机に両手をついて、頭をこすりつけ謝る。

まるで御奉行様の前に平伏す罪人のような俺。

この最強の低姿勢を目の辺りにして、怒りを持続できる奴はあまりいないわけで――

「まぁ、いいわ、気をつけてね」

最後には折れて、踵を返して授業に戻る赤城嬢。

俺が近くで目にした赤城は、やはり美人で優しい先生だった。

とっても、いい香りが体から立ち込め、大人の女性の香りが鼻を甘美に突いてくる。

『先生、僕！』、『何も言わなくて良いの……』、『その先は私に任せて』、『先生！』

『駄目だってそこは――』って！　なんの安っぽいアダルト教師物語だよ！

いや、そんな情欲的な妄想に浸ってる場合じゃないよ！

タイプ2の野郎、急に俺に修羅場を押し付けやがって、とんでもない奴だ。

だけど、まぁ、戻ってきたよ～俺の体～～～～～！

思わず、自分の体を自分で抱きしめてみる。

……ギンゴンガンゴーーーーン〜〜

今日の鐘の音はどこかおかしい。
放送機器が壊れているのか、学園ホラー映画の鐘の音のようだ。

「はい、授業はこれまで、キリーツ、れ〜い、着席！」

先生は教室の地面をコツコツ言わせながら、出口へ向いここを後にした。
さてと、昼飯、ひ・え・？
立ち上がろうとした瞬間、何か言い知れぬ物が体に重く圧し掛かってくる。
なんだこれは？
かつてない眠気、倦怠感、ありえないほどの重力が、俺の体を机へと引きずり落とした。
何なんだこれは……？
おかしい、起き上がる気力すら……飯、意識が……と、お、の、あ、千鶴ちゃんとの約束、あ、ぁ……。

「おい、寝る雄、起きんかい」

「飯いくんだろ？」

千鶴ちゃん……
夢現に彷徨う俺の視界に、薄っすら千鶴ちゃんの姿が映し出されていた。
起き上がりたいんだが、体が言うことを利かない。
それはタイプ2に支配されているわけでもないのだが、押しつぶされるような眠気が、全てのやる気を宇宙の彼方へと弾き飛ばし、ただ眠る事だけを強制してくる。
千鶴ちゃんが嘆息を漏らし、どこかへ去っていく。
あぁ……なんてこっ……った……

#

「寝る雄、寝る雄!、いつまで寝てんだ、帰るぞ!」
このキビキビした懐かしい声は……博君じゃないか。
俺はどれくらい寝てたんだろうか……？　帰る時間って事は3時半くらいかな……？
まだ体が重いが、なんとか声を出せそうだ……
そうだ、時間を聞いてみよう……。
枯れた声を喉から搾り出し、博に辛うじて聞こえるくらいの声を届ける。
「今……何時？」
「もう夕方の5時だぞ」

「なんだって！？」

俺はそれを聞いて弾かれたように顔を上げると、そこには博が腕を組んで、多少いらついた様子で仁王立ちしていた。

まだ体は重いけど、何とか動けるくらいまでは回復しているようだ。

「お前今日変だぞ？」

「見てたけど、妙にテンション高いかと思ったら、今みたいに無気力で寝てばかりとか」

「人が変わったみたいだぞ」

いや、人が変わってたんでしょう。

しかし、あの眠気の説明がつかないな。

あ、千鶴ちゃんは……

起きたばかりのぼやけた頭に、色んな思いが錯綜する。

そんな混沌とした意識の中、俺に天使の声が届く。

「寝る雄、待ちくたびれたぞ、さっさと帰ろう」

博の後ろから、ひょっこり顔を出した千鶴ちゃん。

夕日を真っ向から受けて、眩しそうに冷めた細い目に手を翳していた。

待っててくれたんだ。

「一緒に帰ろう、あ、てか、博、今日雪乃は？」

そうだ、お前雪乃と毎日帰るはずじゃ？

「あぁ、今日は雪乃さんとこの後、ボーリング行くんだよ」
御二人さんはうまいことといっているようだ。
「じゃ、俺先帰るわ」
博は俺の様子が変なのと、そんな俺を心配しているであろう千鶴ちゃんを気遣って、ギリギリまで俺が起きるの待っててくれたようだ。
俺達に手を振った後、左手に巻いた腕時計を見ながら、教室を走り出て行った。
相変わらず、友達思いというか心底いい奴だよお前は……
思わず目頭が熱くなったが、泣く訳には行かない。
すぐ前に千鶴ちゃんがいるんだから。
「千鶴ちゃん、今日ごめんな」
「屋上で一緒に、昼食食べる約束してたのに」
「気にしないよ、寝る雄じゃなかったしね」
え？　どういうこと？
さりげなく、これは爆弾発言のような、原爆のような、水爆のような、アレ？
何を言ってるんだ？
千鶴ちゃんはあの時声を掛けたのが、タイプ2だと知っていたと言うのか？
いや、待て待て！　聞き間違いかもしれない、焦るな寝る雄。
その辺ちゃんと聞いてみよう。

「あのさ、今、俺じゃなかったって言わなかった？」

「言ったよ、あれはお前の中に潜む別人だった」

え、それって気づいてたの？　てか、なんで分かるの？　あれ？
俺は頭の中で？のマークが洗濯機をまわした様に渦を巻いていた。

「ま、気にするな」

いや気になるって！
その場で口を金魚みたいにパクパクさせて、言葉が出てこない俺。
千鶴ちゃんは、夕日に遠い目を流しながら、何かを語ろうとしたが、

「面倒くさい、あたしはもうこの薄汚れた学校を一刻も早く出たいんだ」

「どうしても、続きが聞きたいのなら、他の場所へ行こう」

千鶴ちゃんは、そう言ったかと思うと、スタスタ教室の出口へ向う。

「ちょっと待って〜〜！」

俺は４時間目から机の上に放ったらかされていた、英語の教科書やノート、筆記用具を即座にカバンへ押し込むと、千鶴ちゃんの後を、ふらつく足で追った。

#

俺達は横に並んで歩き、坂道を降りていく途中で、どこへ行こうか思案していた。

「どこ行く？」

「寝る雄カラオケ行かないか？」

俺は歌がミラクルが付くほど下手なんだ。

もちろん却下しようと思ったけど、カラオケっていやぁ、カップルの愛を暖める絶好の場所だよな？　だって、密室だぜ。

俺の顔をした誘惑天使が、俺に向って甘い言葉を囁きかけてくる。

葛藤がしばらく続いていたが、結局、それに抗う悪魔が貧弱なせいで、あっさりと――

「うん、そこいこう」

決まった。

まぁ、いいか。

俺、今まで歌が下手だという理由で、３年くらいカラオケに行ったこと無かったんだけど、なんとかなるよな？

音楽も興味ないせいで、曲とかあまり知らないけど、そんなものは俺達の愛にかかれば、なんとかなるはずだ、きっと！

しかし、良く考えると俺って変わってるよな……趣味とかないし。

過去編、適職。

俺達はカラオケハウスへやってきた。
細い廊下で受付のねーちゃんに、金払って3時間コースドリンク付きを伝える。
廊下に建ち並ぶ部屋のドアから、同年代くらいの男女の声が薄っすら聞こえてくる。
一室に入ると、オレンジの細い長いソファーに並んで座って、リモコンを握る千鶴ちゃん。
店員が飲み物を運んできたようだ。

「飲み物お持ちしました～」

「ごゆっくり～」

小さなテーブルに飲み物を置くと、リモコンで千鶴ちゃんが好きな歌を選曲しはじめる。

「今日はなんだか気分のらないから、憂鬱な女にしようかな」

何その題名……いや、そんな歌が実際あるんだろう。
どんな曲だ？

『今日は～良い事なかった～♪　明日も良いことなさそう～♪
だけど、あなたがいるから～更に憂鬱に～♪』

いや、それ、俺へのあてつけですか？

しかし美声な千鶴ちゃん。綺麗な声してるよほんと。
冷めた細い目を浮かべるそのお顔から、透き通るような声が流れ出てくる。
彼女の歌のリズムになんとなく、頭の振りを合わせながら、その場にしたしむ。
いや～、こんな雰囲気あんまり味わった事ないんだ。俺。
カラオケ行かないしな。

「お粗末さま～寝る雄歌え」

どこか歌いきった後の千鶴ちゃんは、満足そうな顔を浮べ俺に振ってきた。
俺はなに歌おうかな？

「えーっと、選曲、知らない歌ばかりだ」

「寝る雄これ歌え、メランコリボーイ！」

えぇ、なんじゃそれ。
ま、歌ってみるよ。

『鬱だ～鬱だ～鬱だ～♪　……」

いや、俺を鬱にさせるつもりですかあなたは……
しばらく、良く分からんない歌の応酬が続いていたが、俺はそろそろあの事を聞こうかと、千鶴ちゃんの歌が途切れるのを待っていた。
ちょっとは休んでよ～、歌いっぱなしだよ、あんた。

「はー、疲れた、ちょっと休憩～」

ソファーに深く腰掛け、飲み物に手に取る千鶴ちゃん。
今だ、今しかない！
「千鶴ちゃんさ～、そろそろ本題に入りたいんだけど」
「本題？　なんかあったっけ？」
さばさばした表情を俺に向ける。
「ほら～、俺じゃなかったって話」
「あぁ、あれね、あれは……」
突然の沈黙、あれはの言葉が急に低音になったのを聞き逃さなかった。
「ところでさ」
千鶴ちゃんは、あれはの続きを言ってくれるかと思いきや、
「私のママ、女優でしょ」
突如、千鶴ちゃんの母上の話へ。何故その話題を……
千鶴ちゃんはオレンジジュースの氷をストローでかき混ぜ始める。
「特訓と称して、出されたお題をやるよう強制されてるけどね」
あぁ、男を手玉にとる無垢な少女の奴ね……。

「あれ本当はやる気あんまりないんだ、性格じゃないっていうかね、元々私は女優なんかになるつもりはないんだよ」

顔可愛いし、俺を手玉にとったあの千鶴ちゃんの演技は、たいしたものだと思うけどな～。

千鶴ちゃんはジュースを置くと、カバンの中から何かを取り出した。

とても怪しい黒っぽい本。

それをテーブルに置いて俺に見せる。

『あの世は身近にある　著　柊三太夫』

なんですかその本は……

「私実は、霊能者になりたい。もしくは占い師、占星術師、祈祷師、陰陽師など」

「ええ！？」

女優じゃなく、そんな怪しい職業に就きたいだって！

あんた、そりゃ似合いすぎだよ……

思ってもいない言葉を聞いて、俺は開いた口が閉まらない。

視線を降ろして、冷めた細い目にどこか照れ臭さのようなものが映る。

こんな顔は今まで見たことないな――本気か？

「なんで、そんなもんになりたいの？」

俺はとりあえず彼女の志望動機を聞いてみる事にした。

「いや～、私小さい時から、色々見えるからさ、性に合ってるな～って思って」

色々ってなにが……

「例えば、今日寝る雄を支配していた幽霊とか」

「え？　なに言ってんの？」

思わず、体全体に鳥肌を逆立てながら、聞いてみた。
いや、マジ怖いんですけど。

「寝る雄、あんたには5体の霊魂がついてるよ」

……

「まさか、今日俺を支配していたのは、幽霊だって事？」

「そういう事、ま、慣れればたいした事無いよ」

いや～～～～！　慣れたくないよそんなのと！
俺は5体とか言われて、血の気がうせる。
いや、その前に何故俺にとりつく？

「ちょっと俺についてるっていう幽霊について、詳しく教えてくれる？」

「いいよ、じゃあ、初歩的な事から教えてあげよう」

口端が右に怪しく割れる。
なんかすっげ～～楽しそうに笑ってる。
怖いよ、まじで似合いすぎてるから……。

過去編、怪しい講義。

「幽霊っていうのは、何も意思を持って動いているわけじゃないんだよ」

千鶴ちゃんの怪しい講義が始まった。

選曲画面を消し去り、僅かに聞こえるのは俺の吐息と千鶴ちゃんの話す声だけだ。

話の途中、間を空けると、千鶴ちゃんが、氷をストローでかき回しグラスを手に取り嚥下する。

「それでさ、幽霊ってのは私が思うには残留思念であって、残りかす？　幽霊本人は既にあっちの世界に行ってしまってるんだけど、生きている間の感情は死んだ後もこの世に残る。そういったものがふわふわ魂と言う形態で残っていると思うわけだ」

更に深く息を吸って言葉を紡ぐ。

熱く熱く語っている。普段から考えられない饒舌ぶり。

こりゃ、嵌ってます。

さすが将来なりたい職業に関わる話だけあって、詳しいよ。

口を挟む暇がないので、俺はしばらく黙って聞いておくよ。

「で～、たま～にその残留思念の魂と波長が合う人がいてね。その思念はそういった人に吸い寄せられる傾向があるんだ。ただ横に寄り添うだけのもあるし、体の中に入り憑くものもある。寝る雄についているのは後者」

俺って霊が寄ってきやすいのか？

う～ん、そう言えば、旅行から帰ると、体が異様に重かったり、

肩がこったりするけど、憑かれてたのかな？
そして今回も、取り憑かれてると。
手に鳥肌が立ってきたけど、まぁ続き我慢して聞こう。
解決策を言ってくれるはずだ。
言ってくれないと夜寝れないよ？

「で、そいつらは取り憑くわけだけど、別に本人に意思があるわけじゃない。ただ、自然に吸い寄せられて寝る雄の体に入ってしまった。そういうものが入った場合、まずスポンジと同じ原理なんだけど、彼等は空虚な体の中に取り付いた人間の今まで経験したものや、知識などをそのまま自分の中に吸収してしまい、まるで自分がその本人であるかのように感じ、そして行動してしまう。だけど、性格とかは残留思念に残った生前の性格が優先されて、例えば、寝る雄になりきっているんだけど、性格は別人みたいになるわけだ」

なげぇ……長いけどなんとなく分かってきたよ。
つまり、俺に取り憑く奴等は、寝る雄だと思っているけど、性格がそれぞれ違う訳だ。
ま、理屈は分かったよ。
たださ、問題は俺の意識を無視して、外にしゃしゃり出てきて好き放題することなんだけど。しかもその間全く自由が利かないしさ。
その事について、ここで尋ねてみよう。

「大体分かったよ、千鶴ちゃん。ただ俺が聞きたいのはそんな小難しい原理じゃないよ、こいつらがたまに外に出てきて、俺を端に追いやって無視をきめこんだまま、俺の体をもてあそぶ事にあるんだ、これの解消法について何かある？」

細い目を瞑って、顎に指を当てて、俺の質問に対しての答えを真剣に考えている。

さすがに、プロを目指してるだけあるみたいで、熱心だ。
こんな一面があろうとは、思わなかったな。

「今ね、私も勉強中だから、解消法って言われても困るんだけど、興味はあるので、とことん、解明に手を貸すつもり。でーー、質問あるんだけど、寝る雄が意識を押しやられ、彼に体を乗っ取られる時ってどんな時？」

うーん、どうだっけ、そうだな～……
過去二件を思い出してみると、一回目は千鶴ちゃんが兄貴に殴られそうになって、やばい！　助けなきゃ！って思った時。
二回目は、神楽にからまれ、やばいーー！　って窮地に追いやられた時。
この二つの事件のキーワードは――『やばい』だ。

「やばい時、どうしようーーって時だったと思う」

「なるほど、つまり、寝る雄がやばいって頭が真白になった時に、あいつが入りこんでくるわけだ」

千鶴ちゃんは小さなノートをカバンから取り出すと、つらつらと何かをメモり始めた。
取調べの刑事のおっちゃんみたいだ。
カツ丼でも出てきそうだ。
あぁ、腹減ってきたな～、今日の晩飯は何だろう？

「と言う事は、私が今言えるのは、そういう事態になる事を避けて通るか、そうなってた時にも頭を真白にせず、自分の意識をしっかりもって、そいつが入る隙間を与えない事だと思う」

意識が晩飯に行きかけると、また現実的な意見を述べる千鶴ちゃん。
確かにそうかもしれないけど、結局追い払えないって事？
「ま、寝る雄、しばらく我慢だよ、それにまだ外に現れたのは5体のうち一人だし、今後の成行きを見ないとね、時間が経てばそのうち、解決方法が分かってくるかも」

そうだった、まだ一人しか出てきていない。
後の4体もいつか出てくるのか？
しかし、しばらく俺このままかよ～
俺は右手を頭につけ、考える人のポーズを取る。いや、この場合、悩める人だよ。
あ、そんな事はいいんだ、聞いておきたい事があった。

「あ、そそ、体乗っ取られて、しばらくして解放された後、すんごい眠くて眠くてどうしようもなかったんだけど、これってどういう事さ？」

「あぁ、幽霊に取り憑かれると、経験、知識も吸い取られるけど、精神的肉体的なエネルギーも吸い取られるからね、すんごい疲労感と眠気が襲ってくるのは普通。まぁ死なない程度に栄養補給と睡眠とることだね」

エネルギ～とられる？
怖い事をさくっと語る千鶴ちゃん。
寿命縮んだりしないよね……家帰って飯たらふく食ってよく寝ないとやばいな。
しかし、迷惑なのが憑いてるよな、どっか本物の祈祷師に頼んだ方が早いのかな？

でもああいうの、お金かかる上に胡散臭いよな、本当に祓える奴なんて何分の1だよ。
やっぱり様子見るしかないかな。

過去編、嵐の前の静けさ。

ＡＭ７：００

ま～～～たまた、朝を迎えました。

でも、今日も学校だけど、花金だよ。

明日は土曜日、うちの高校は休みだ。

あと一日頑張ろう。

さて、さて、昨日は、千鶴ちゃんと心霊会？　じゃない、俺の悩みをこと細かく聞いてもらい、取りあえず、様子見をしようと言う事で結論がついたわけだ。

俺には５体の幽霊がついてるってさ。

いつ憑いたんだろう……大体彼女はいつから俺が飼っている幽霊に気がついてたんだろう？

残り４対はいつ出てくるんだ？　謎は深まるばかりだ。

いやそんな軽口叩いてる場合じゃない、俺そのうち精神壊れるよ。

昨日だって、寝れなかったんだから。幽霊とか駄目なんだよ。

あ～～～でも考えても仕方が無い。嫌な事には蓋をして生きていこう。

朝から考える事じゃないしね。

さぁ、起きるべ。

――台所、７時１５分

「寝る雄、最近学校うまく行ってるか？」

「うん、ノープロブレムだよ」

俺に珍しく朝の会話を投げかけてきた男がいた。

彼の名前は浩二。俺の父上だ。

短いオールバックの前方部の生え際に、白髪が薄っすら生えそろい、平べったい長方形のメガネをかけたごく普通の萎びたサラリーマン。
管理職で、残業は毎晩のようにあって、帰ってくるのは9時以降がザラのようで、疲れてるご様子。
その隣で慌しく飯を口に掻き込む母桃子、パートで月から土までスーパーのレジとして働いている。
更に俺の隣に雪乃。省略。
珍しく家族4人が朝から食卓を囲んでいた。

「おかーさん、もっとゆっくり食べたら？」

雪乃は眉を潜めて、母が玉子焼きを食べる時に食い散らす、テーブルに落ちた破片を拾いながら怪訝に言った。

「母さんはね、忙しいのよ、お上品になんか食べてられないの！」

パートに行くだけあって、それなりに頭は綺麗に纏まっており、化粧も万全なようだ。
時折、白い仮面にヒビが入ってる事があるが、それは敢て言わない。
殺されるからね。
しかし、なんでそんなに早食いなんだよ。
メタボになるぜ？

「父さん、俺も雪乃も相方いるんだぜ」

「こら！　兄ちゃん余計な事言わないでよ！」

俺は隠し事は嫌いなんで、千鶴ちゃんの事も博の事もついしゃべ

っちまった。
だが、失敗かな、雪乃が怒っている。
憤怒の形相で箸を止めて、睨んでいます。
「相方ってなんだ？　お笑いでもやっとんのか？」
父上はメガネを拭きながら、ボケた返答をしてきた。
面倒臭いなぁ――って思っていたら、母上が、
「馬鹿ね！　寝る雄に彼女、雪乃に彼氏が出来たって言ってんのよ、父さんったら」
母は全く顔色一つ変えず、それについて淡々と語った。
さもありなん、と納得しているようだ。
だが、父上は、
「な、なんだと！！　寝る雄はともかく、雪乃に彼氏！？」
何で俺はともかくなんだよ、俺の事は気にならないのかよ？
ま、いいけど、ちょっと面白そうなので、二人の会話を聞いてみるか。
「あーもうーーお兄のせいだ」
また俺に顔を向けて睨んでくる。
ったく往生際の悪い奴だ。
トドメをさしてやる。
「こいつさ、俺の親友の博と付き合ってるんだよ」

「「なんだって！！」」

母と父が驚愕の声を同時に上げて、雪乃を一斉に見た。

博とは長い付き合いなので、子供の頃から父母はその存在を知っている。

しかし、リアクション大きいな。

「な、何、なんでそんなに驚いてるの？」

雪乃がその反応に少し目をきょどらせて言った。

目を丸くした父母の空間だけ凍っていたが、すぐに火炎放射でも浴びせたように通常の動きに戻ってそれぞれ、柔らかい口調で語り始める。

「ま～、最初は驚いたけど、いいじゃない～、博君か、いい子よ、あの子は。うんうん、いい選択したわね」

母は穏やかな表情で、何事もなかったようにご飯をついばむ。

「博君か……あの子は小さい時からしっかりしてたな、あの子なら雪乃を任せて大丈夫だな、母さん」

父も安堵を顔に滲ませ、笑顔で母に会話を振った。

「そうね、結婚はまだ早いけど、いずれね」

おいおい、もうそんな先まで博で納得してしまってるんかい！

「おっと、急がないと！　母さん出かけてくるよ！」

「待って！　父さんネクタイが曲がってる、それに一緒に行きましょ」

二人して何か臭い夫婦水入らずごっこやっていますが、敢てスルーして自分は飯を掻き込むと、立ち上がった。

その俺の顔を、雪乃がやっぱりまだ睨んでいて、

「余計な事を……」

と、眉を吊り上げながら低い声で言った。

怒るなよ、そんなに……

空気が淀み始めたので、仕方なく退散退散。

俺は背中に嫌な視線を浴びながらも、階段を上って自室に戻った。

#

「えーっと、全部揃ってるな」

俺は部屋を出るのが怖かった。

雪乃に四の五の説教浴びせられるかもしれないからだ。

あいつはああ見えて、一度根にもつと蛇のようにしつこい所がある。

アイツの干支がは蛇だからか？　関係ないか……

カバンは持った！　学生服は装備した！　後は玄関で靴を履いて外へ出るだけだ。

「3、2、1、GO―！」

俺は部屋のドアを勢い良く開けると、風を撒いて疾風の如く、廊下を駆け抜ける、階段を滑り降りる、あ、雪乃の怖い顔と擦れ違った、だが振り返らない。
玄関についた、靴を吐いた、ドアを開けて、閉めて鍵を閉めた。

「OK！」

脱出成功！　俺の予想通りだ、ゆっくりやってたら、あいつに捕まってたな。
さー学校へ行くぞ～！

#

教室のドアの前までやって来ました。
さぁ深呼吸して～吐いて～開けますか。
いや、俺もう敵いないしな。
何もそんなに緊張する事ないんだよ。
堂々と入ろう。

ガラ～ササササ！

ドアを横にスライドさせると、すり足、生徒達の間を縫って歩く。
自分の席が視界に入ったが、誰か座っている。
千鶴ちゃんか。
俺の机の上で、昨日の怪しい黒い本を読んでいる。
俯いて本に目をやり、口元が細く割れる様は、机の周りに独自の異空間を創り上げているかのようだ。
声がかけ辛い、まだ俺に気づいていないようだ、真ん前にいると

いうのに。
それほど彼女はあの本の内容に嵌っている。
思わず生唾を飲んでしまった。
この空間を切り裂く声を発して良いものだろうか？
いや、ここは俺の席だ。
権限は俺にある、行くぞ……

「やぁ、千鶴ちゃん！　おはよ！」

気さくに朗らかに挨拶を投げかけた。

「ちっ、来たか……」

なに、その『ちっ』って……
俺に視線を合わせると、珍しくあの失われた笑顔を向けて、

「おはよう、寝る雄君！」

何なんだ！　何を企んでるんだ！
様子がどこかおかしい。その笑顔は封印したはずじゃ？
いや、今の地点で追及は辞めておこう。

「千鶴ちゃん、何か良く分からないけど、今日機嫌良さそうだね！」

追求はしないけど、取りあえず、明るい方向へと舵取りをば。
千鶴ちゃんは表情がみるみる崩れていく。
急変した。怖い、今の発言は失敗か。
その冷めた細い目はともかく、机に置いた右拳が震えているのはなぜ？

「寝る雄、あんたは鈍感だね、私の全てを飲み込むようなこの怒りの波動を見切れないとは、私の彼氏としてはマイナスだよ……」

うぇ、すっげー機嫌悪いじゃん。

何があったんだろう。俺のせい……って事はないよな？

普段さめた細い目は浮かべるけど、怒った所なんかまだ目にしたこと無かった。

だけど、今、目の前にいる千鶴ちゃんは、般若のような顔をして、憤怒を露にしている。

何があったんだろう……

過去編、新たな……。

「ど、どうしたの？」

「……ここじゃ話せない」

「じゃ、移動しよっか」

「うん」

千鶴ちゃんは立ち上がると、肩をいからせながら、俊敏な動きで生徒達の間を縫って歩く。

俺は股間に両手を揃えて、猫背気味にその後を追った。

いや～、なんかいつもより歩き方に無駄が無いね。

最短距離を進むあれは、アサシンかスリかとも思える足裁きだ。

怒ると動きが鋭くなるんだな、とりあえず彼女の癖発見だ～。

とか――言ってる場合じゃないよ！　早いよずんずんと！

「待って～……」

俺は千鶴ちゃんに追いつくと、３階の理科室を右に曲がった細い廊下に行こうと進言した。

ここ穴場なんだよ、いつでも人がいないんだ。こういう場所を確保するって事は結構重要でね。ちょっとした内緒話とかする時とかにいいんだよ。

博が極秘に手に入れたＨなＤＶＤの受け渡し場所としても重宝している。

「このへんで話そう」

俺が場所を指差すと千鶴ちゃんは頷いて、廊下の窓に近付きスライドさせて空けた。
窓の桟にもたれかかり、顔を少し外に出すと、眼下の校舎裏の細い道に視線を流していた。
表情見分けるの難しい娘なんだけど、さっきまでの憤怒の形相は幾分、外の空気を吸って、和らいでいるようにも見える気が。
さて、なんて声をかけよう……取りあえず、
「千鶴ちゃん、何かあったの？」
俺が気さくに声をかけると、窓から出していた顔を引っ込めて、俺のほうに暗い影を孕んだ顔を向けた。
まだ和らいでいなかった……彼女はその顔を向けたまま押し黙っている。
この重い沈黙は……と千鶴ちゃんの威圧感に押され、右足を半歩後ろに引いた時――
「寝る雄君～、聞いてよ～ママったら、ママッたら～」
失われたあの顔で、俺の胸に顔を擦りつけながら、ぶりぶりモードで話し出した。
ちょ、めちゃめちゃ可愛いし、この胸に当たる小さな頭がとっても愛らしくて、頭を後ろから柔らかく抱きたくなるんだけど……なぜ今これに変身するの？
「あのね、ママったらね、この洗練された私の演技がね、駄目だって言うの！」
彼女は俺の胸に内側に柔らかく握った両拳を置いて、顔を上げて

言った。
涙の粒を目尻に溜め、丸顔の愛らしい円らな瞳を真直ぐ俺の目に向けてくる。
かわいい……な、なんてかわいいんだ、
その無垢で愛らしい生き物を目の前にして、俺の何かが音を立てて崩れ始める。

「千鶴ちゃん〜〜〜」

もう理性というものが吹っ飛んだね。
がばっと両手を横に開いて彼女の体を抱きこむと、口を尖らせて可愛らしい唇に突撃させたんだ。
そしたら――

「ここまで！」

って聞こえたかと思うと、顎を右手で下から押し上げられた。
だけど――もう俺の勢いは止まらなくって、その手を顎の力で押し戻し再度キスを迫る。
しかし、彼女は押し返すことを突然やめると、後ろに体を引いた。
当然、勢いがついているから、前のめりに体を倒すけど、それを千鶴ちゃんはさらっと体を横にして避けた。
俺は勢い余って壁に額を打ち付けると、額を押さえながら顔をしかめていた。
いててて……なに……今の流れるような体裁きは……合気道の使い手か？

「ほら、完璧、なにがいけないんだか」

俺は額を撫でながら振り返ると、千鶴ちゃんが冷めた細い目で平

然とそう述べた。

「寝る雄、今の私の演技良かったでしょ？」

「いっつあぽーふぇくと」

親指を立てて、彼女の演技を褒め称えた。申し分ありません……

そのままベッドに押し倒してもいいくらい……

#

「何だそんな事か～、別にいいんじゃない？　どうせ占い師になるんだし適当でさ」

「違うよ、霊媒師だよ、それに一応何ヶ月もあの顔を練習してきて、極めてたつもりだったから、悔しくってね」

「でも完璧だったよ、俺から見たら１００点満点だよ」

は～～～、なんていうか長閑で、平和だなぁ。

さっきまでの怒りがこの程度の理由だなんて。来る前はさ、俺に何か不満でもあるのかと思って冷や冷やしてたよ。

さぁ、かえんべ、授業も始るし――と、安心しきって教室へ向けて踵を返すと、

「寝る雄君、もう一度良く私の顔みて」

「え？　もういいって、何度見ても……」

千鶴ちゃんが呼び止めてきて、タイプ2の顔を近づけてくる。
う～ん、どこがいけないんだろうな～？
俺は仕方ないからまじまじと覗き込み、敢て欠点らしい所を探していると――

「ちゅ～～～～」

千鶴ちゃんが不意をついて、唇を俺の唇に重ねてきたんだ、というよりは吸い付いているというか。
俺はまるで抵抗せずに、ただそれを受け入れていた。
なんて柔らかいんだ……あぁ、生暖かい……幸せ……
色んな思いが交錯しているが、全く纏まらなくて、そうしているうちにも、彼女の柔らかい唇がゆっくり離れていく。
もう俺は茫然自失で、頬が少し赤らんだ彼女の顔を見つめていた。

「じゃ、先行くね～」

ちょっと俺はそれに反応が出来なかった。放心状態で思考が停止していたからだ。
しかし――その思考の空白地帯が生まれた時、何者かが俺を侵食し始める。
またあの猛烈な眠気が急に襲ってきたかと思うと、その重々しさに額を右手で押さえて、意識が遠のきはじめたんだ。

「……」

#

「授業終ります～、きり～つ、れい、着席！」

授業は終った、古典の授業は終ったんだけど――体は動いているんだけど、俺の意思で動かせないんだ。

これは、あの現象と同じだ――俺は一度同じ経験をしているので、前よりは冷静にこの状態を、押し込められた場所から眺めていた。

しかし、こいつ、まだ声を発していない。授業中、真面目にノートを取り、授業を聞いていただけだ。ま、授業中だし仕方無いんだけどね。

ただ、雰囲気が前のタイプ2の時とは明らかに違う。クラスの女の子をちらちら見ている。

まるで物色しているかのような目の動き、昔の俺のような飢えた眼差しできょろきょろしていた。

これは――第2の幽霊が現れたんだろうか？　俺はそう思うと、しばらくこいつの動向を見守ることにした、いやそれしかできないんだけどね！

椅子を引いて立ち上がるぞ。どこへ行くつもりだ？

千鶴ちゃんとこか。

「千鶴ちゃん、元気？」

「ん？　元気だけど……」

彼女も気づいているようで、どこか不審な目で俺を見ている。

何か見えているのだろうか。

「そうか、それは良かった！　じゃちょっとトイレ行ってくるね～」

「はいな」

千鶴ちゃんにたぶん笑顔で振り向いて、手を振ったよ。
教室を出ると、振り返りながら何かに警戒をしているな。良く分からないが……
あれ、急に走り出した、どこ行くつもりだ？
――あ、素早く廊下を右折した。その後、さっと壁際に張り付いて、顔を少し出して走ってきた廊下を探った後、何かに安堵したのか大きく息を吐いた。
ここは――同じ学年の違うクラスの教室が連なるエリアだ。
ん？　前から一人メガネをかけた、大人しそうな女子がとぼとぼ歩いてくる。
その彼女を食い入るように見る『タイプ3』としておこうか。
美肌、色白、優等生タイプ、三つ編み、メガネ、メガネ取ったらたぶん可愛い。（寝る雄スコープ）
たまにクラスにいる、大人しくて無口な女の子ってかんじだろうか？　人見知りタイプ？（寝る雄、独断と偏見スコープ）
そんな彼女に近付いていくぞ……

過去編、衝撃の事実？

「あのー」

「は、はい？」

メガネ娘に声掛けたぞ、何言うつもりだ？

両手を胸元でもじもじさせやがって……

女の子、困ってるじゃないか、さっさと何か言えよ。

「あなた！」

「え？」

彼女が目を大きくして突然大きな声を放ち、指をさしてきた。タイプ3もビックリしたようで、鼓動が早鐘のように鳴っているよ。

「ちょっと、あの、こちらへ来てもらえますか？」

「え？」

女の子がタイプ3の手を引っ張り、薄暗い人気のない廊下に連れていくんですが、普通逆じゃない？　と思いながらも俺はどうする事もできないし、タイプ3は手を惹かれるまま、付いて行くよ。なんだか俺まで、ドキドキするじゃないか……

「えーっと、祓いますね」

ん？　どういう事？

俺には意味が分からないが、タイプ3も分からないようで、女の子の様子をまじまじと見つめていた。女の子はタイプ3に向かい合って、神妙な顔で突然――右人差し指と中指だけ揃えて伸ばし、俺に向って宙に左から右に横線を引いたかと思うと、

「臨！」

と唱えた後、更にその横線の左側に重なるように上から下へ縦線を描いて、

「兵！」

「闘！　者！　皆！　陳！　列！　在！　前！」

更にまた最初の横線のすぐ下に新たな横線、縦線の右横に新たな縦線と、一つ一つ線を引く際に唱えながら、格子が宙に描かれる。最後に彼女が前！　といい終えると、気のせいか俺の体が軽くなった気がしたんだ。

そして――

「あなたに取り付いてた霊、全部払いましたよ」

「ええ？」

思わず俺が発した言葉が、そのまま外に漏れる。え？　俺自力でしゃべれてる？　あれ？　いつの間にか支配が解けてる！　ええ……どうなってんだ？

「九字護身法を施しました、一時的ですが、あなたの霊は取り払え

ました」

ええ！？　マジ？　今さっきの訳分からないので、俺に憑いている霊全部払ったの？

霊媒師ですか、あなたは……彼女は手をスカートの辺りでそろえると、にっこり上品な笑みを浮かべた。

俺はタイプ3が話しかけたおかげで、偶然彼女と出くわしたんだけど、その彼女が俺の幽霊を祓ってくれたらしい。とってもミラクルな展開に、どう言ったら良いか分からない。

だけど、なんかとってもこの子の事が気になってしまって、いや……浮気とかじゃないよ？　ただ、霊を祓ったって言うんだから、興味普通湧くよね？　詳細聞いてみたくなってしまったんだ。

「あの、少しお話しませんか？」

俺から声を掛けてしまった。すると、彼女は快く笑顔で首を縦に振った。

#

「あの、あなたのお名前聞いていいですか？」

「新宮雅と言います」

「僕は寝る雄です、よろしく」

笑顔でお互い自己紹介を交わした。

雅ちゃんか、しかし、よくよく間近で顔を見ると、可愛いよな～……色白でメガネ娘で笑顔が素敵で――って俺には千鶴ちゃんがいるんだ！　そんなんで呼び止めた訳じゃないんだ！
霊の事もっと聞くために声を掛けたんだよ。下心なんか微塵もないよ！

「あの～、さっき払ったって言いましたよね」

「はい、あなたについていた五体の幽霊を除霊致しました」

「あなたは一体？　なぜそんな事ができるんですか？」

「私の家は霊感が強い家系で、今の九字を使えば大抵払えますね、ですが……」

彼女は少し視線を下に逸らし、何か言いにくそうにしている。
ですがっ何？　気になる、早く言って……

「あなたは霊を呼びやすく、そして取り付き易い体質なので、今回祓いましたが、またすぐに近々霊に……」

ええ……そんなの困るよ、せっかく祓ってもらったのに……

「何とかならないですか？」

会ったばかりだけど、もう縋り付ける人はこの人しかいないと思って、無理にでも聞いてみる。だって、俺もうやだよ！　こんなの辛いし。

「えーっと、答えになるか分からないですが……私の考えでは……」

彼女はまた言いづらそうに言葉に詰まりながらも、俺の訴えるような眼差しに促されるように、言葉を紡ぎ始める。

「あなたは、元々そんな体質じゃなかったはずです……、あなたの傍に居る、誰か霊感の強い親密な人の影響を受けて、呼び寄せる体質が目覚めてしまったんだと思います。だから、その、あの……」

そこまで言ったんだから、あと少しきっちり語ってくださいよ～。彼女はまた視線を降ろして口ごもるが、開き直ったのか、俺の目を見て話し始めたんだ。

「だから、その、本当に私的な意見なんで恐縮なんですが、たぶん、親密な人、つまり親族の方……うーん、これは無いかな。あなたを見る限り、最近その力に覚醒された後がありますから。だから、最近、親密になった友達か彼女、どちらか分かりませんが、その方との縁を切ることが最良かと思います……」

友達ってったって、博は最近じゃないよな。ずっと昔っからだし。てことは――最近、親密になった霊感の強い人って、まさか……千鶴ちゃん？

千鶴ちゃんと別れないと、この霊感体質治らないって事！？　そんな事出来るわけ……

俺がその場で呆然としていると、彼女は悲哀に満ちた眼で俺を見つめて、

「辛いのは分かります……あ、また何かあったら私にいつでも相談してくださいね、お力になります。二年C組みにいますから。でわ授業始りますので、失礼致します」

俺の前でにっこり笑みを浮かべて、お辞儀すると少し小走りで教室へ入っていった。

取り残された俺はしばらく、どうしていいか分からず、その場で立ち尽くしていた。

過去編、決意。

「あれ、寝る雄、幽霊きえてるじゃん」

俺が教室へ戻って自分の席につくと、千鶴ちゃんが近付いてきて、細い目を少しばかり見開いて言った。

うーん、なんて言おうか。取りあえず知らない振りで行こう。

「え！　本当？　まじかよ！」

「うん、全部消えてるよ、私もびっくりしたよ」

すくっと立ち上がって、多少オーバーアクション気味に驚いて見せる。

しかし、内心複雑だ……　机の上に置いた手に虚ろな視線を置いたまま、俺は黙っていた。千鶴ちゃんは俺を一周しながら、あらゆる角度から何かを調べている。急に幽霊が全部いなくなって、どうもそれが、不思議で仕方ないといった様子だ。

「まぁ、良くわかんないけど、良かったじゃん！」

いきなり背中をぽ～んと乾いた音を立てて軽く叩かれる。

「はは、良かった良かった～！　はは……」

愛想笑いというか、力ない笑いを搾り出す。おっと、千鶴ちゃんは鋭いから、もう少し元気良く笑わないと、気づかれちまうぞ。腹から声を出せ寝る雄！

「ハーーーーハハハ！」

ちょっとでか過ぎた。余計不審がってるよ。千鶴ちゃんが顎に指を当てて、覗き込んでるってば……

#

「Ｔｈｅ ｋｉｎｇ ｈａｓ ｔｈｅ ｉｌｌｕｓｉｏｎ ｔｈａｔ ｔｈｅ ｉｓ ｔｈｅ ｇｒｅａｔｅｓｔ ｉｎ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ……」

英語の授業が始っていた。赤城香先生様だ。

本もノートも開いているし、意識もはっきりしているけど、何も俺の耳には届かない。

ただ、さっきの雅ちゃんの言葉がずっと頭の中でぐるぐると回っていた。

あの子の力は、俺の霊を払った功績から言っても本物に違いない。千鶴ちゃんが俺を見て幽霊が完全に祓われてると言った事で、更にそれは確信へと変わった。

雅ちゃんは本物だ。その雅ちゃんが俺に間接的にだけど、親密な霊感の強い人、つまり千鶴ちゃんと別れれば、今のややこしい霊感体質は解消されるだろうと言ったんだ。しかし、そんな事できる訳ないんだ。だってこれからだよ？　これから～～～～～って時に何でそんな事できるんだよ。でも、放って置いたら、また幽霊に支配される時がくる。どうしたらいいんだ。

幽霊に支配されながらも、彼女と付き合うか？　――それも愛の一つか？

そうだよな。こんな事でせっかく温まり始めた関係を、無に帰し

てなるものか……　俺は幽霊に屈しない！　決めたぞ！　俺はどんな幽霊の妨害も撥ね退け、千鶴ちゃんと生きていく！

「寝る雄君？　どうしたの？」

俺は心の中で意気込んでいるうちに、いつの間にかテーブルに両手をついて立ち尽くしていた。

「あ、すみません、目が悪いもんだからつい」

「ごめんね、もう少し大きめに書くから」

「はい……」

いや、ノートは真白だった。途端に黒板に書かれている英語を、丸写しし始める。

そうだ、俺は彼女を愛している。こんな事で俺の大事な女神を絶対に捨てたりするものか！

シャーペンを握る手に力入りまくりで、ぽきぽき折りながらも、直ぐに連打して書きなぐる。今日の俺は違うぜ！　逆境での愛に俺の心は燃え盛っているんだ。

「はい、今日はこれまで、ちゃんと予習しておいてね」

「きり～つ、れい、着席～！」

俺は授業が終ると、凛とした表情で背筋を伸ばし、千鶴ちゃんの席へと近付いていく。

間近までくると彼女の前に陣取り、上からきりりとした目つきで見下ろした。

「寝る雄どうした？」

「ふ……いや……ちょっと外の涼風に辺りに行かないか？」

「いいけど」

千鶴ちゃんは俺の普段見せない表情に、困惑気味というか、何か悪いものでも食べたのか？っと言った表情を浮かべている。

#

「気持ちいいね～」

「うん……」

俺たちはさっきキスをした場所で、また二人して窓から顔を出して話し込んでいた。

眼下に見える細い路地、その上のなだらかな斜面に木々や草花が所狭しと生えている。

この学校は山に隣接して作られている。だからって田舎ってわけでもない。ただ、そういった環境にあるため、外に漂う空気はとても新鮮で、木々の爽やかな香りが心地よく感じられる。この誰も来ない場所で恋人同士として肩を並べて話せる幸せ……至福の時です。

「千鶴ちゃん、可愛いよね」

「何よいきなり！」

彼女は頬を赤くして、照れてるようにも見える。冷めた細い目がそれを顕著には、感じさせ無いんだけど、声色から彼女の気持ちが分かるようになって来た。進歩だ……着実に俺たちは分かり合えるようになって来ている。

「ねね、千鶴ちゃん、家にいる時何してるの？」

「ん？　今はえーっと、呪い返しの研究かな？」

ははは、可愛い趣味して、――……聞かなきゃ良かった。

気を取り直して、俺が何かを言おうとした時、どうも俺が聞いたことで、彼女のオカルト熱を刺激してしまったらしい。俺が口を開く前に、話しはじめる。

「そういや、この間実験的に兄貴の髪抜いて、それを藁人形に入れて、五寸釘で部屋の壁に打ち付けたんだよ。普通は丑の刻に神社の裏手の木に打つもんなんだけどさ、案外家でやっても霊感あればいけるらしくってね！」

「うんうん……」

俺は引きつった笑みで相槌を打つも、身震いする思いだった。兄貴に普通打つか～……

「寝る間際に心臓がちくちくして～とか言って、調子悪そうだった！」

怖い話をしながら無邪気に微笑む千鶴ちゃん。まぁ、彼女の趣味だし、そんなこともあってもいいよな～とは思いながらも、兄貴に同情してしまう。

う～ん、髪の毛は抜かれないようにしないと……と思わず髪を撫でる。
――しかし……こんな雰囲気は、嫌だ～～～～～！　違うんだ～！　こんな陰気な事を話すために、ここへ来た訳じゃないんだ。もっと穏やかで甘い話をするために来たんだよ！　話題転換を図るぞ。
「ねね、千鶴ちゃん、キスしよ！」
「ん？　さっきので足りなかったの？　仕方ないなぁ……」
熱い熱いオカルト話を切るには、これくらい刺激的な内容じゃなきゃまず無理だ。
今度ばかりは、さすがに顔を赤らめているのが俺にも分かる。
唇と唇が接近し始める。千鶴ちゃんの肩に優しく手を回す。さぁ――って時に後ろから声がしたんだ。
「あ、すみません」
俺は反射的に千鶴ちゃんの肩を掴み、キスを一時的に中断した。
声のする方へ視線を向けると、
「あ、あなたは！」
「へ？」
「や、やぁ……新宮さん……」
そこには雅ちゃんが立ち尽くしていた。何か重そうな荷物を運んでいる途中らしい。
し、しかし、なんというバッドタイミング……

なんて言おう……　俺の頭の中で様々ないい訳が駆け巡る。

過去編、バイオレンス。

「あ、千鶴ちゃん、この方、えーっと、通りすがりにぶつかって、彼女の持っているものが地面にちらかったもんだから、拾ってさしあげた新宮雅さんっていう二年C組の人ですよ～」

俺は咄嗟に作り上げた嘘八百を並べ立てたんだけど、どこかおかしい。人間予期しない事態に陥ると、口走っている事への理解力も欠如してしまう。なんでそこまで詳しいんだよ。

あーあ、こんな言い訳通るわけが～……とはいえ、新宮さんに目配せをして、傍らにいる子が俺とどういう関係であるか、今がどんだけ修羅場かを伝える。

新宮さんは少し焦った目で俺の目配せを受け止めていたが、さすがに、機転の利く彼女はどうやら分かってくれたらしく、

「この間はどうも～、私ドジだから前見てなくって、目も悪いせいもあって、でも、寝る雄さん丁寧に拾ってくださって助かりました」

「いやいや、とんでもない」

新宮さんいいかんじだよ～、さてと……お隣の千鶴ちゃんはどんな顔を……？

……！？　冷めた細い目――いや……これノーマルか。分かりづれぇ。

取りあえず、つつがなくこの場を乗り切るために、さらっと話を進めるしかない。

「じゃ、千鶴ちゃん、他行こうか？」

「いや……」

ひ〜！　なぜ拒否る……？

千鶴ちゃんは、新宮さんの近くまで歩み寄ると、微笑んだ。

「重そうだね、ほら、寝る雄も手伝ってやんな」

「え？」

「お、おう」

三段重ねのダンボールを二人で分けて、持ち運ぶ。

「すみません」

「どこもって行くの〜？」

「あ、そこの部屋です」

新宮さんがポケットから鍵を取り出すと、部屋を空けた。中へ踏み込むと、倉庫みたいな部屋で、ダンボールが累々と重なって並んでいた。

俺たちは荷物を置くと、新宮さんはまだ少しこの部屋に用事があるらしく、有難うと、微笑んで、部屋を出て行く俺たちを見送った。

階段を下りる間、爽やかな顔で俺は歩いていた。一時的とは言え、修羅場と思われる事態に陥り、それをさらりと終えた後の開放感はまた格別だ。

「千鶴ちゃん、今度はまた人絶対来ないとこ探しとくね」

「別に、あそこでいいんじゃないの？　それに――」

千鶴ちゃんが階段の踊り場で足を止めた。俺は生唾をごくりと飲んだ。

鋭い千鶴ちゃんが、さっきのやり取りで納得いくわけないよな……

ただ、マジな話、彼女の特殊能力は別として、本当にそれ以外何にもないんだ。

「それに、私は大観衆の前でも寝る雄とキスくらいできるよ」

「ええ！？　まじで？」

「うん、全然平気」

何言うかと思えば、いや――これはこれでとんでもない事だ。俺にはそんな真似はとてもできない。千鶴ちゃんって奔放に生きているんだな。周りに捉われない我が道を行く女。格好良いけど、俺に押し付けないでね。

#

４時限目が終った頃、昼飯前に俺はトイレを済まそうと教室を出た。

廊下を足取り軽く歩を進める。飯時前って言うのは、スキップでもしたくなるくらい体が軽い。だが、そんな俺の日常が早くも崩れ去る出来事が襲い掛かってきた。

突然、特大の眠気が俺の頭に圧し掛かってきた。一瞬眩暈かとも

思われるような、地が揺らぐ感覚は一体……

「……」

ええ、俺の体はまたしても、乗っ取られていた。どこからかやって来た海賊に舵を奪われてしまった。

あれだけ意識が軽快でクリアな俺の意識を、一瞬で深く暗い谷底へと突き落とすなんて、こんな事は初めてだ……俺は押し込められた闇の中で、その何者かの言動を観察している。

がに股で歩くソレは、トイレを足で蹴って乱暴に中へと足を踏み入れる。トイレの中には用を足す善良な生徒達が、数人いて、俺が入ってくると一瞥を軽くした。

右端が空いている。少し歩くスピードが速まる。だが――そんな時、刹那のタイミングで先に後ろから割り込もうとした男子がいた。

「お先ぃ」

知らない奴だけど、割り込んで先に便座で用を足そうとしていた。その男を捉える視界が上下に小刻みに揺れ始める。

両拳は既に硬く握り締められ、そして――

「てめぇ！　殺されたいのかコルァ！」

「うわぁ」

その男子の尻を後ろから蹴り上げる。小便が途中で止まらない男子は、必死にそれに耐えながら、小便を中に垂らしこんでいた。

よく見ると、逆立った派手な髪型、大きな体、結構怖そうな奴だよ。そんな事はおかまいなしに蹴りこんでいた。しかし、男子は耐え切り、小便を終らせるとジッパーを閉じた。

「いきなり何するんじゃあ、外にひっかかるだろ、この野郎！」

「うるせぇ！」

うぉ～～痛い、とてつもない殴り合いに発展した。こいつは避けない。鈍いのか？　痛いよ、それでもパンチを返す余裕はあるらしい。だけど、俺は痛いんだよ！　相手の顔も擦り切れ血は出てるし、青く張れてボコボコになっていくが、俺の顔も相当酷い事になっているだろう。それが分かるほど全弾浴びてるし……

「コルァ～、便所で暴れてる奴は誰だ～」

「やべぇ」

教師の声が扉の向こうの廊下から、聞こえてきた。
殴り合っているのを、誰かが密告したんだろう。
それを聞くや、最後、相手の右ストレートを交わした後、そそくさと俺の体は外へ走り去ろうとした。
しかし、入り口で教師に背中の端を掴まれ、逃げ切れなかった。

「二人とも、保健室行った後、職員室来い！　いいな！」

「……」

「はい」

ゴツイ教師が傷だらけの男子と俺に言った。
確かこいつは違うクラスの体育の先生だっけ、名前は忘れた。
隣の男子が俺の顔を睨む、たぶん俺も睨みかえしている模様。

しかし、エライ事に……ちょっと今回俺の体乗っ取ったやつ気性荒すぎるぞ……

あの一件以来、俺の生活は変わって言った。
とにかく、色んな奴等に乗っ取られ、日増しに酷くなっていった。
暴力的な霊は所構わず、俺を支配し暴れるもんだから、教室内にも俺の異常さがどんどん浸透していった。

「ノーマル！」

教壇の前にたって千鶴ちゃんが、ノーマルと生徒達に伝える。
これは千鶴ちゃんが日々の俺の状態を、生徒達に教える事を約束したからだ。
まぁ、それまでにクラスの皆に俺の特異体質を洗いざらい話した事により、真相を知った皆が、日々の俺の様子を彼女の千鶴ちゃんに公表する事を頼んだという経緯がある。
要はもう俺はクラスでは、とても厄介な存在として認知されていた。
そして――霊に取り付かれまくった後の俺は……とにかく眠いんだ。

「眠い～」

クラスのやっかいものだが、霊が取り付いていない俺はつまりノーマルな状態で、机で寝そべってる間は、生徒達に安息がもたらされる。
俺は押しつぶされるような眠気の中、一人孤独に考えていた。
今の状態ははっきり言って酷すぎる……これを解消するには、千鶴ちゃんと別れるしかないと雅ちゃんは言った。

完

しかし、俺の愛は不変だ。こんな事で――負けてなるもんか。
意気込んで立ち上がってみると、生徒達がぎょっとした目でこちらを見た。
俺は廊下の外へすごすご歩いていく。
部屋を出た後は、突然また騒がしくなったのが分かる。
それだけ俺を恐怖しているんだ。

「寝る雄さん！」

「ん？」

猫背で力なく歩いていると、雅ちゃんが明るい顔で俺に話しかけてきた。

「いい方法見つけました！」

「は？」

「千鶴さんと別れなくても、霊体質を直す方法です！」

俺は立ち止まった。そして彼女の両肩を揺すっていた。失礼なのは承知だが、もう心の衝動が外部へと漏れて止まらなかった。

「ほんとかよ！　まじで！　どうすんの！」

「こっち来て下さい」

雅ちゃんに手を引張られ、人気のない廊下まで上がってきた。
走ったせいで多少息がきれていた。
だけど、そんな事はどうでもいい、どうしたら……

「いいですか、千鶴さんはとても霊力の強い人です。あなたは彼女と縁という糸で結ばれたために、霊感体質が酷くなりました」

「うんうん、それで？」

「それなら、こうするんです！」

雅ちゃんが……今俺の唇にキスをしている。到底あってはならない事だ。

だけど、頭がくらくらする。顔が熱気を伴って火照る。彼女の顔も真っ赤だ。

熱いキスが交わされ、しばらくした後――

「はい、終わり！」

彼女はさっと唇を話して快活に言った。

俺は咄嗟にキスを奪われ、更に混乱気味の頭でどう言って良いか分からなかった。

これは一体何なんだったんだ……

「これで、あなたの千鶴さんとの縁は、私との縁と衝突し相殺される事により弱まりました」

「ど、どういうこと？」

「つまりですね、私はあなたにキスをすることにより、あなたとの縁を多少なりとも強めました。それにより、霊力が強い私の縁、千鶴さんとの元々の縁が寝る雄さんの体内でぶつかり合い、その相殺効果で霊を呼び寄せる力を失わせたんです」

「なんかよく分からないけど、ひょっとして俺？」

「そうです！　治りました。完治です！」

俺がそれでも喜びを表さないのは、浮気めいた事をしてしまったせいだ。

だが彼女はそれも分かっていたとばかりに、

「大丈夫です、このことは私の心の深くにしまって置きます」

彼女は顔を赤らめ、静かに目を瞑る。俺もそう言われて、はいそうですかとは言えない。

だって彼女のファーストキスを、好きでもない俺に奪われてしまったようなもんなんだから。

責任感じちゃうよ。

「気にしないでください。私も寝る雄さんの事嫌いじゃないから……」

「ええ？　どういうこと？」

「千鶴さんへの優しさ、一途な愛を見ていて、なんだか私あなたを見る目が変わりました、それに……」

彼女は一呼吸置いて、また恥ずかしそうに話す。

「あなたの非人間的魅力が気に入りました。霊に好かれるあなたは、きっと人間的にも素晴らしい人なんだと思います。で、でも勘違いしないでください。これは私の奥深くにしまって置きます。片思い

として……」

ええ～～、そんなん言われても～、なんか告白されてるし。俺は一体……

雅ちゃんは踵を返すと、

「じゃ～、千鶴さんと頑張ってくださいね～影から応援しています～～失礼します」

雅ちゃんは爽やかな笑顔を向けて、お辞儀をして去って行った。

俺はその場で呆然と――しなかった。教室に走っていた。

「千鶴ちゃん～！　俺治ったよー！」

俊敏な動きをする俺に、生徒達は奇異な眼差しを送ってくる。

しかし、どうでもいいんだ。そんな事は。

「えぇ、確かに幽霊消えてるけど、どうやって？」

言葉に詰まる。雅ちゃんのことは口が裂けても言えない。

だけど、それは言葉に出さなくても、時が解決してくれるだろう。

「ちょっとしたお呪いかけてもらったのさ」

「え、誰に？」

「通りすがりの凄腕敏腕霊能力者にね！」

「はぁ？　そんな奴どこにいんのよ～」

「通りすがりだから、もうどっか行っちゃったよ！」

「おしえんかー！」

「いつかね～！」

最初は雅ちゃんの事も気になったけど、彼女とはあれ以来、笑顔で挨拶するものの、まともに話す事はしなくなった。

それは彼女が俺を気遣って、距離を置いてくれているせいかもしれない。

数ヵ月後には生徒達も俺が変身しなくなり、時が経つに連れて今までの事は風化していった。

しかし、千鶴ちゃんとの愛はそれに反比例して、これから深く深くお互いを知っていくことになる。あぁ、これで良かったのかな？

――まぁいっか。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6496e/

寝る雄は今日もいく

2010年10月15日23時09分発行